［資料紹介］近世染織技法書における糊
―染織技術保護における原材料の意義の検証に向けて―

菊池理予・牛村仁美

はじめに

近世の染織技法書には様々な染織材料がみられる。染料や顔料、精練の材料、これらに加えて糊も多く記載されている。

これまで無形文化遺産部で行った現地調査においても、糊は重要な材料の一つであった。例えば、平成26・27（2014・2015）年度にかけて実施した埼玉県熊谷市との共同調査事業[1]では、模様をつけるための防染糊や捺染糊[2]が話題となった。当時、熊谷染の工房に糊を製造販売していた安達糊料株式会社は、事業を縮小するために京都の同業者である巴製糊工業株式会社へ取引先を紹介していた[3]。熊谷染の工房（小紋や型友禅を行う工房）では、糊の購入先が変わったことで手元に届く糊がそれまでのものとは異なるものになり、新しく購入し始めた糊を各工房の仕様にするために調整していた時期であった。

また、同時期に調査を行った長板中形の松原伸生（重要無形文化財「長板中形」〈各個認定〉）[4]や秩父銘仙（国指定伝統的工芸品）の田中捺染工場では、糊を自作しており、製法についても調査することができた[5]。平成28・29（2016・2017）年度に行った青花紙の製作技術に関する滋賀県草津市との共同調査では、染織技術者への聞き取りの中で友禅染には糯米で作られる真糊（友禅糊）に加え、合成染料を加えた捺染糊（色糊・写し糊)、ゴム糊も利用されていることも確認できた[6]。

このように現地調査からは、糊は様々な技法に用いる材料であること、季節や天候、文様によって調整するため、同じ技法でも工房ごとに調合が異なることなどが理解できた。糊はそれぞれの技術と直結する主要な材料といえるのである。

そこで、本稿では染織材料の中でも糊に注目し、近世染織技法書に記された糊について整理することにした。今後、これらの情報を活用して、無形文化遺産部で調査を行なう染織工房の技術が近世の技術をどのように受け継いできたものであるのかを考察する基礎資料としていきたい。

１．研究背景―染織材料としての糊の先行研究―

染織技術に使われる糊は、様々な種類と役割がある。例えば、糸を保護して織りやすくする糊や、生地に張りを持たせて整える糊、金属箔を接着する糊、生地を染め分けて模様を表す防染糊や捺染糊などがある。これらの糊のうち、友禅染の糸目糊や伏糊、型友禅の捺染糊や写し糊、江戸小紋の目糊や地糊、長板中形の型付糊などに使われる防染糊や捺染糊は、糊を落とす工程があるため、完成した

作品からは糊を確認することができない。志多野義夫は、染織関係の糊は「糸の保護、織物の成型、染色の際の防染などに使っていますが、仕上げ用薬剤以外は染織工芸では必要なものでありながら、製品に残ってはならないものがほとんどです」[7] と記しており、糊が制作に欠かせない材料でありながら作品には残らないことを指摘している。

作品から検証しにくいことと関係があるのか、これまで染織材料としての糊の研究は主に制作に関わる立場から行われてきた。

昭和９（1934）に刊行された高橋新六『京染の秘訣』[8] には、京染（京都で染めた染物の総称）における糊について詳述されている。同書の第七編「紋糊と模様糊」第一章「防染糊の種類と紋糊」では「糊置とは糯粉、精米粉又は其の他の澱粉類を煮て拵へた糊を以て、種々の線や模様を畫取り防染の装置をすることを云ふ」が、近年では防染の目的以外に「染料を配合した糊を以て寫し染にする事」が盛んに行われおり、写し染は「防染であると共に糊自體の有つて居る色素を生地に着色せしむる」もので「防染着色糊」といえると紹介している[9]。同書からは、戦前の京都における糊の使用状況が理解できるが、おそらく文化財保護法が制定された昭和25（1950）年時も近世までの伝統的な糊と近代以降の捺染糊（写し糊）が広く使用されていたと推測される。また、同書の第十二編「捺染」第二章「捺染用の糊の原料」では、澱粉、ゴム、蛋白質が主な種類として紹介されている[10]。

捺染糊については産業の観点から新素材開発や製品不具合の要因への対処を目的とした検証実験が行われている。それらは旧京都市産業技術研究所繊維技術センター・旧京都市染織試験場（現在の地方独立行政法人京都市産業技術研究所）[11] のメンバーが中心となり『京染と精練染色』[12]『染色研究』[13] などに研究成果が報告されている。

一方、作家や職人が用いる糊については『月刊染織α』（染織と生活社）に紹介されている。昭和63（1988）年の志多野義夫「米（でんぷん）を素材にした染織糊料の基礎知識」その１、その２では[14]、染織材料の糊が網羅的に整理されている。同記事では、糊の具体的な使用例が紹介されており、項目として織物と糊、織物の仕上げと糊、染色と糊を取り上げている[15]。

特に、染色と糊の項では、写し友禅、敷糊、トロ糊、姫糊、江戸小紋、長板中形、一珍糊、型絵染、泣き止め、糊流し染の糊について記されている。このうち、写し友禅、江戸小紋（目糊、地糊）、長板中形、一珍糊、型絵染（紅型を含む）は、染色用の防染糊と捺染糊について説明しており、敷糊、トロ糊、江戸小紋（生糊）は、捺染板に生地を貼り付ける用途が紹介されている。ちなみに姫糊は、捺染板に生地を貼り付ける用途に加え、張り物や洗濯糊の用途もあることも記されている。

また、泣き止めの糊には布海苔、トラガカント、クリスタルゴムなどが選ばれていることを紹介し、染料や顔料の固着させるカゼインにも泣き止めの効果があると言及している。

一方、写し友禅の項では、製糊業社について触れられており、京都の型染めに使用する糊は専門の製糊業者が製造していること、製糊業社では敷糊用、接着用（トロ糊）、写し糊（友禅糊）、ネバ糊（防染用）、ウール用、合成繊維用、スクリーン用、反応染料用など各社50種類以上の捺染用元糊があることに触れている。

上記以外にも『月刊染織α』には、作家や職人の技術についての取材記事や技術者本人の寄稿が多数掲載されている。その中には型染、友禅染、筒描[16]、金彩[17]、糊纈染[18] における糊の使い方や、一

珍糊[19]、撒糊[20]、写糊[21]、揚子糊[22]、玉糊[23] のレシピが公開されている。無形文化財保護の観点からは、重要無形文化財・友禅揚子糊の山田栄一（昭和30〈1955〉年５月11日認定、昭和31〈1956〉８月11日解除）に関する記録があることも注目される[24]。

染織技法書を使用した先行研究は、拙稿[25] でも整理した通り、染色技法の色材に関するものが多く、茶・鼠系統の染色については和田、片岸ら[26]、黄系統については石井、齊藤ら[27]、赤系統については深津、小松、齊藤ら[28]、紫系統については福岡、笠作、齊藤ら[29] の研究があげられる。丸塚による黒・茶の劣化に対する意識と知識を検証した研究[30]、洗濯・しみ抜きの手法を検証した研究[31] では、染色するための助剤となる布海苔や豆汁に関する記載や、汚れを落としとしての飯粒、うどん粉、牛皮膠などを取り上げている[32]。また、染織技法の復元では河上ら[33]、土方、嶋野の報告が上げられる。土方、嶋野の研究は、近世から近代における防染糊についてとりあげ、染織技法書の記載を参考に糊を復元し考察を行っている。

嶋野は型染における防染糊としての大豆糊（一珍糊の一種と同報では解釈している）を江戸時代の染織技法書の記述を参考に復元して考察している[34]。嶋野は、中国では大豆による糊（印花麺）が用いられていたことに触れ、一方の日本では糯米による糊が発生するまでの間、一珍糊が盛んに用いられていたことをふまえ、染織技法書に登場する一珍糊の原材料は小麦粉が中心になることに注目している。復元考察によれば、型紙による大豆糊を用いた模様染は可能であるが、大豆糊単独では型置きが難しく、掻き落とすことも困難で、糊焼けで布が変色することを明らかにしている。しかしながら、小麦粉による一珍糊と混ぜ合わせることでこれが解消したため、日本では大豆が主流ではなく小麦粉の一珍糊が使用されている可能性を指摘している。一方、土方は染織技法書に記された防染糊に注目し、それらを一珍糊（同報では小麦粉、大豆粉、蕎麦粉、蕨粉等に多量の石灰をいれて作った糊と定義している）と糯米による糊に大別し、６種類の糊を試作している[35]。同報では、伸縮性に富む絹に糊を置くには一珍糊ではなく糯米の糊の方が適していること、絹に模様を引き染めする目的から糯米による糊が出現した可能性を指摘している。また、別報では、江戸時代後期から明治時代にかけて染織技法書に登場する玉糊（一珍糊の一種）を復元して考察している[36]。

このように、近世染織技法書の糊の記載は制作を伴う研究において活用されてきたが、それは防染糊を中心としており、染織材料としての糊について網羅的に情報が抽出されているとはいえない。そこで本稿では、近世染織技法書の中から染織材料としての糊についての記載を整理することとした。

２．近世染織技法書に記載された糊

２－１　本稿で対象とする資料と抽出方法

今回、『染料植物譜』（昭和12〈1937〉年）に掲載されている慶安４（1651）年以降に刊行された染織技法書から、糊に関連する記載を抽出した（表１、表２）。なお、明治時代の初期の可能性がある文献も近世の情報が含まれているため、一部対象としている。抽出された記述は122件であった。本稿では、糊の原材料としても使われる「めし」や糠などを使用する精練や洗濯、汚れ落としといった役割に関しての記載は除外することとした。泣き止めとしての効果をもつ豆汁についても別稿ですで

に紹介しているため割愛した[37]。また、記載内容について現状では解釈が困難なものについては、可能性を広げて除外せずに抽出している。

近世染織技法書には、糊の原材料、製法、使用用途について記されているものもあり、それらの用語は表２のキーワード欄に記した。しかしながら、糊を使用する繊維や生地の情報があるものは少なく、使用用途を比較する情報が揃わないものが大半であり、今回抽出した記載から各糊の役割を十分に考察することは難しい事が明らかとなった。また、各技法書の示す言葉が同じものを表しているのかという点も検証が必要である。

そのことを踏まえたうえで、今回抽出された記載を、糊に関する情報の大枠を理解するために①糊の原材料と製法、②使用用途の２つの視点で記載を取り上げる。以下、２－２、２－３の出典には『染料植物譜』（昭和12〈1937〉年）の記載頁を括弧内に記す。

２－２　糊の原材料と製法

近世染織技法書に記された主な原材料は、糠・米・糯米・小麦であり、さらに葛・そば・蒟蒻・豆も見られた（表２キーワード欄参照）。実際には、これらの原材料を加工して糊の材料として使用している例も確認できた。例えば、米を原材料とする表記には、白米・めし・飯粒・めしのとり湯（米を多めの水で炊き、沸騰した湯をとる）・米泔汁・米泔・米の白みづ・米の糊・小米などの表記が見られる。また、糠の記載にもぬか・もち米のぬか・なまぬか・小ぬか（こぬか）・もみぬかというように煎糠ではなく生糠であることや、糠をより細かくしたこぬか（粉糠）であることを示す記載もあった（表２本文欄の二重下線、キーワード欄参照）。

記載内容の中には、先述した現地調査の小紋や型友禅、長板中形と同様の原材料も見られ、これらは先行研究で紹介した嶋野、土方両氏も注目していた。例えば、『紺屋茶染口伝書』第三　のりかげん（590頁）には、糊に糯米の糠と塩を加えることが記されている。同箇所には、「つねのこもん」の「しろめ」は、糊に「もち米のぬか」を加え、「ぐろめ」は「しろめ」に比べて糠を少し控える。さらに「のりおき」には糊に塩を加えることが記されている。

また、『秘事記』「十二染物▲紺屋の糊の法」（63頁）や『民家日用　廣益秘事大全』紺屋糊を作る法（章：萬染物之法）（854頁）には、糯粉、蠣の灰を原料とした紺屋糊の製法についての記載が見られる。蠣の灰は石灰同様の効果を持つと考えられる。

一方、『聞書秘伝抄』七　箔すりはくおしやう付のりねりかげんの事（569－570頁）には、姫糊の製法について「米を一夜水にほとばかしこまかにすりきぬにてこすべし」という記載があり、姫糊が米を原料としていることが理解できる。

２－３　糊の使用用途

糊の記載にはＡ摺箔を施す際に使用する糊や、Ｂ製織に使用する糊、Ｃ防染糊、Ｄ泣き止めの糊など、使用用途を推測できるものがあった。

Ａ　摺箔を施す際に使用する糊

『聞書秘伝抄』七　箔すりはくおしやう付のりねりかげんの事（569－570頁）に、とさふのり、ひ

めのり、かたのりを使用することが記されている。同箇所のとさふのりの記載は、土佐産のふのりであることが確認できる点が注目される。

B　製織に使用する糊

羅紗を起毛し整える役割としての記載が『聞書秘伝抄』と『錦嚢智術全書』⑦「秘事指南車」に見られる。

『聞書秘伝抄』十八「らしやのおりやうの事」（576頁）には白水とふのり、そして、『錦嚢智術全書』⑦「秘事指南車」（871頁）にも米泔汁、海蘿の記載がある。なお、白水と米泔汁は米の研ぎ汁を示していると思われる。

また、『染料植物譜』には所収されていないが、大関増業『機織彙編』（『機織彙編／木綿製作弁』江戸科学叢書15、恒和出版、1979）にも製織に使用する糊の記載がある。「錦織製方」の項（145頁）には経糸にはふのり、緯糸には色によって紺屋糊又はわらび糊、葛を用いるとあり、「縐紗（ちりめん）織方の項（167頁）も白米とのり粉、菜種油による糊の製法が記されている。

C　防染糊

防染糊の記載は多く、型染の防染糊や紋所の染め抜き、更紗の模様の防染に関する記載が見られる。

『当世染物鑑』両めんこもんつけ（627頁）には、長板中形のように生地の表面と裏面の両方から糊を置いている技法について記されている。その際の糊は「のりはあかねに而も。あいはなに而もいろのりにしてつけて。」とある。これは、長板中形の緋粉を加えた糊や、友禅の糸目糊などで使用されている茜により赤く発色させた防染糊と同様に、生地は染まらないが防染糊と解釈できる。記載のある「あいはな」は顔料化した藍花を示すものか、露草・青花を示すものかは検討が必要であるが、藍顔料の場合には接着剤無しでは生地には染まらず、露草や青花は染料で水に落ちる特徴を持つので、生地に染着することなく糊に混ぜて使用することができる。

型紙を置くための糊も、いくつかのバリエーションが見られる。『民家日用　廣益秘事大全』「紋所をつくるには」（854頁）には、紋所と小紋の防染に紺屋糊を使用することが記されている。また、『染物秘伝』「りきう染」（755頁）には、「一、こんにやく粘にて形を付る。貳枚形成る共三枚形なり共打也。」というように蒟蒻を使用した糊を型付に使用したことがうかがえる。

紋所を染め抜く糊にも多様である。『紺屋茶染口伝書』第廿四桃がわそめしほのかげん・第二もん所のりのさしかげん（590頁）には、姫糊とこのりを調合した糊の記載があり、『秘事記』十二染物▲もんの付やう（635頁）には、絹における紋所の防染として紺屋糊の記載が見られる。『民家日用　廣益秘事大全』「紋所をつくるには」（854頁）にも紺屋糊を使用した工程について「紺屋糊をかたくして紋のうへにひき。その上に手水ぬかをふりかけてほし。其後布をそむるなり。」と記されている。紺屋糊同様に糯粉を原料とするものとして、『染物重宝記』「紋ぬきの事」（777、784頁）には、「茶染屋ものは紋をもちのりにつけてよし。」という記載がある。

その他、『紺屋仁三次覚書』「染物紋所付るぬきよふの仕方」（735頁）には、絹の紋所の防染に、薬

種五ツ色（そばのこ、ぎしやくから、ごぼうし、白凡んごし、白ちやうげ）を粉にして、藍ものならば上酒でねり付け、茶類ならば酢にてねり付け、檳榔子の類は二度塗るという記載が見られる。

一方、先行研究で紹介した嶋野、土方両氏も注目していた一珍糊を使用した防染糊の例となるのがそばの飛粉（とびこ）・散粉（ちりこ）[38]、明礬、水膠 を利用する方法である。『更紗図譜』更紗描法心得の事（696頁）には散粉を用いた白く染め抜く工程について「（前略）紋がらなど白く染脱んとおもふには。散粉（ちりこ）散粉の事下にしるすにて。細くとも。太くとも。其好に随て其染脱く所を描き。よく乾して後。一面に絵具にて塗て。其後洗ひおとせば。白く模様は残るなり。（後略）」との記載があり、散粉をおいてよく乾かしてから絵具を塗り洗い落とせば白く模様が残ることが記され、防染として使用されていることがわかる。

D　泣き止めの糊

泣き止めの糊は、顔料の接着や染料と混ぜて使用する例が見られた。『秘事記』「十二染物▲又方又は黒染」（633頁）には、僧の着する墨染衣の法として、まず、紺で下染し、墨に葛糊を練り使用すると、白衣にも墨が映らず、糊が見えないという記載が見られる。 同様に、『民家日用　廣益秘事大全』「黒染」（847－848頁）にも、紺で下染し、墨に葛糊を練り使用することが記され、特に「惣てくろき物の糊は葛を用ゆべし。のりのあと少しも見えず。」と黒染には葛糊を使うべきであると指摘している。

『紺屋仁三次覚書』「役者すりのしよふ」（723頁）には「一、ゑこのあぶらを煮て、黒摺なら松煙墨。よくまぜて、ふのりをまぜる。赤摺ならベンガラ。朱青摺なら緑青。」と荏油に松煙墨や弁柄、緑青とふのりを混ぜる記載がある。

また、『秘伝徳用　諸色手染草』には、豆汁にふのりを混ぜて使用する例が見られる。同書の「うぐひす茶」（651頁）では、「ごまめのしるにあひをまぜ。ふのり少し入。一ぺん染て。かりやすのせんじしるにて一ぺんそめうへのとめにめうばん少し水にかきたて染てよし。」とあり、「かわらけ色」（654頁）には、「にいし五両を豆汁にといて、ふのりを少し入れて染める。」「しやれがき」（654頁）には、「玉子つちをすみ火にてやきかへし。豆汁すりまぜ、ふのり少し入れて、はけにて引染め。」と何れも染色の助剤として使用される豆汁にふのりを少量混ぜて使用している。

また、模様の染め分けや描絵にもふのりや豆汁を使用していることは、『紺屋仁三次覚書』「さらさ仕よふの事」（727頁）、「白上りにもよふ付仕上け」（729頁）からもうかがえる。

一方、糊は現地調査でも調整の多い材料であることを記したが、それは近世染織技法書の記載からもうかがうことができた。例えば、『紺屋仁三次覚書』には、糊の調整について「なまのりにて形付もよふ付はやそめ（の）事」（725頁）には早く型付を行うための工夫が記され、「きぬもの正平紋仕よふ」（735頁）には、絹地に正平紋を施す場合には、おしろいを溶いた水に型糊と続飯を使用して調整する工夫が記されている。

先述した通り、今回抽出された記載について、それぞれの糊の技法における役割を解釈するには、

さらなる情報整理と検討が必要であるが、土方が示した通り、防染糊には、糯米を原料としたもの、一珍糊に大別できるということは、今回抽出した記載の上でも確認できた。そのうち、糯米を原材料とするタイプは、現在も使用されている糯米や糠、塩を原材料としている系統へ受け継がれていると考えられる。さらにこの系統は、近世では使われていなかった合成染料と組み合わせても受け継がれていることは注目すべきである。同様に、泣き止めに使用されるふのりや豆汁も、合成染料と組み合わせながら現在でも使用されている材料であり、我が国の染色技術を考えていく上では、注目すべき材料といえるであろう。

３．染織技術保護における原材料の意義の検証に向けて

本稿で紹介した資料により、現在でも使用されている糯米や糠、塩を原材料とした糊、ふのりや豆汁が近世にも利用されていたことが明らかとなった。

現在の染織技術を含む工芸技術の用具・原材料を保護する法律として、文化財保護法がある。昭和25（1950）年に制定された同法は、我が国の文化財の枠組みの中に無形文化財として工芸技術の一分野として染織を対象としている。

無形文化財とは「演劇・音楽・工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの（文化財保護法第２条第１項第２号）」を示す。文化財保護法制定から約70年の間、工芸技術の保護措置には、重要無形文化財の指定認定制度、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択、選定保存技術の選定認定の制度によって様々な技術が保護の対象となってきた。

令和３（2021）年、無形文化財と無形民俗文化財にも登録の制度が新設されたが[39]、その新設制度においても工芸技術の保護措置は従来と同様の手法がとられる。それは、技術を登録し、その技術を高度に体得している者、又はその集団を認定するという手法である。無形の文化財は、それを体現できる「人」（又はその集団）の行為によってはじめて実体をもつ。工芸技術の場合、その技術を体現するには、原材料、そして用具が不可欠である。それを示すように、昭和50（1975）年の文化財保護法の改正で新設された選定保存技術の枠組みでは、工芸技術の原材料や用具の製作技術が保護の対象となってきた。さらに同改正では、重要無形文化財の認定に保持団体認定[40]が加わり、保持団体認定で設けられた指定要件には、当該重要無形文化財の原材料や用具が明記されている。このように、工芸技術の保護を考える上では、原材料や用具は重要要素として捉えられてきたといえる[41]。

同法では、無形文化財に歴史上の価値と芸術上の価値を掲げている。染織分野においては本稿で取り上げた近世染織技法書によって材料（あるいは原材料）について近世の状況を検討することができる。近世染織技法書は、染織技術の歴史上の価値を検討するには、重要な資料といえるであろう。

これまで重要無形文化財として保護の対象となった工芸技術（染織分野）を振り返ってみると、近代以降に我が国に導入された技術も対象となっている事が理解できる。詳しくは拙稿を参照いただきたいが[42]、例えば、江戸小紋に用いられる地糊（しごき糊）には、合成染料を加えた糯米系統の捺染糊が用いられている。江戸小紋は初期に保護対象となった染織技術であり、地糊を使用していることについても十分に議論されたと考えられる。

本稿で得られた防染糊の原材料は、現在でも染織材料としてみられるものが多くある。一方で、同じ型染であっても、捺染糊と防染糊では染色のメカニズムが異なり、工程が変わるのである。そのことを考えても、原材料が技術に与える影響は大きいといえる。

現在の技術は近世の染織技術のどのような点が受け継がれたものであるのか、原材料の加工技術は受け継がれているのか、それらは染織技術を支える重要な論点である。今後も染織技術保護における原材料の意義の検証にむけて、本稿で紹介した資料を活用しながら調査研究を続けていきたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、東京文化財研究所保存科学研究センター早川典子氏よりご助言をいただきました。記して感謝いたします。

付記

本研究は科学研究費基盤研究（C）（一般）「染織技術史に関する研究―原材料の国産化に焦点をあてて―」課題番号23K02026の成果の一部です。

《注》

1）事業については、『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書』（東京文化財研究所無形文化遺産部、2015年９月）参照。

2）捺染糊の発生については貫秀高「広瀬治助と堀川新三郎（その２）」『京染と精練染色』29(3)、京染・精練染色研究会、1979年１月、1-13頁を参照。

3）注１前掲書、73、84頁参照。

4）パンフレット「長板中形―松原伸生の技―」文化財防災ネットワーク推進事業、東京文化財研究所発行、2019年５月。

5）拙稿「復刻銘仙のこれから―分業のこれから―」須坂クラシック美術館20周年「記念特別展図録『きものモダニズム』、2015年、138-141頁。

6）『青花紙製作技術に関する共同調査報告書―染織技術を支える草津のわざ―』2018年10月、東京文化財研究所参照。糊についてのアンケート結果は、菊池理予、半戸文「第６章　青花紙の染織技術への利用」80-106頁参照。

7）志多野義夫「米（でんぷん）を素材にした染織糊料の基礎知識（その１）」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』89、染織と生活社、1988年８月、44頁。

8）高橋新六『京染の秘訣』洛東書院、1934年。

9）注７前掲書、245頁。

10）注７前掲書、365-366頁。

11）地方独立行政法人京都市産業技術研究所ホームページの沿革欄を参照。
https://tc-kyoto.or.jp/aboutus/（2024年２月28日閲覧）

12）京染・精練染色研究会の機関紙。京染・精練染色研究会は，模様染業界を中心とした京染研究会

（1950年６月24日設立）と無地染業界を中心とした精練染色研究会（1952年４月10日設立）が統合され，設立された。

https://tc-kyoto.or.jp/cooperation/kyozome_seiren/（2023年12月1日閲覧）

13）京都染色研究会の機関紙。京都染色研究会（1947年３月13日設立）は、繊維・染色機械・染料薬品メーカーと染色加工企業などを会員とする研究会。

https://tc-kyoto.or.jp/cooperation/senshoku/（2023年12月１日閲覧）

14）①注７前掲書、44-47頁。

②志多野義夫「米（でんぷん）を素材にした染織糊料の基礎知識（その２）」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』92、染織と生活社、1988年11月、40-42頁。

15）注14②前掲書、40-42頁。

16）「特集　筒描　筒引　糊引の技」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』33、染織と生活社、1983年12月、１-49頁。

17）「金彩工芸　材料・用具の知識」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』52、染織と生活社、1985年７月、14-15頁。

和田光正「金彩友禅の変遷と現状　そして展望」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』52、染織と生活社、1985年７月、16-17頁。

18）編集部「糊纈染こけちぞめの美と技法　西耕三郎さんの仕事から」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』132、染織と生活社、1992年３月、18-22頁。

19）入江伸以知「一陳糊染め　技法のすべて」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』74、染織と生活社、1987年5月、２-15頁。

志多野義夫「一珍染め糊料事典」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』74、染織と生活社、1987年５月、26-27頁。

岡本章「伝統の技法を探る　一珍糊　水野正一さん」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』７、染織と生活社、1981年10月、133-137頁。

20）竹島初太郎「撒糊染め素材　撒糊を造る基礎技法」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』92、染織と生活社、1988年11月、34-39頁。

21）志多野義夫「型紙捺染　〈写し〉の技法」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』58、染織と生活社、1986年１月。21-25頁。

22）編集部「友禅楊枝糊復興　人間国宝・故山田栄一の意志を継ぐ　二代栄一　山田忠夫さんの仕事」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』146、染織と生活社、1993年５月、18-23頁。

早川久治「幻の友禅技法・揚子糊　人間国宝・山田栄一の秘法」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』134、染織と生活社、1992年５月、26-34頁。

岡本章「伝統に技法を探る　楊枝ノリ・興亡譜　故・山田栄一さん」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』４、染織と生活社、1981年７月、137-142頁。

早川久治「重要文化財･友禅揚子糊の秘法 」日本服飾学会 編『日本服飾学会誌』５、日本服飾学

会、1986年、99-102頁。

23）編集部「糊染の特殊技法　山田治雄さんに聞く　友禅糊よもやまばなし」『月刊染織α：染めと織りを楽しむ人の生活情報誌』128、染織と生活社、1991年11月、35頁。

24）山田栄一の技術記録は文化財保護委員会によるものも作成されているが、公開されていない。注22早川久治の記事には文化財保護委員会の記録の内容に言及し、技術も詳述している。

25）拙稿「染色技法書に見られる豆汁の役割：寛文６年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として」『無形文化遺産研究報告』９、国立文化財機構東京文化財研究所、2015年。

26）片岸博子「江戸時代の染色技法書に現われた色名について 茶色に関する一考察」『家政學研究』32（２）、奈良女子大学、1986年、162-170頁。

片岸博子「江戸時代の染色に関する研究（２）鼠色に関する一考察」『家政學研究』33（２）、奈良女子大学、1987年、107-113頁。

片岸博子「江戸時代の染色に関する研究（３）納戸色に関する一考察」『家政學研究』34（２）、奈良女子大学、1988年、107-113頁。

片岸博子「江戸時代の染色技法書にみる色彩の認識と色名の使い分けについて」『家政學研究』39（２）、奈良女子大学、1993年、80-93頁。

和田淑子・片岸博子「梅染の色相について」『帝塚山工芸』３、帝塚山大学、1994年、84-94頁。

和田淑子・片岸博子「江戸時代の染色技法書にみる茶色染色の検討」『帝塚山短期大学紀要　人文・社会科学編・自然科学編』32、帝塚山大学、1995年、177-191頁。

片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その１濃茶・薄茶について」『日本服飾学会誌』16、服飾文化学会、1997年、11-18頁。

片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その２下染茶について」『日本服飾学会誌』17、服飾文化学会、1998年、25-32頁。

片岸博子「江戸時代における茶色の認識に関する一考察 その３灰汁茶・鳶色について」『日本服飾学会誌』17、服飾文化学会、1998年、33-38頁。

片岸博子「『染物重宝記』にみる茶色の分類と色上げ染直し」『日本服飾学会誌』19、大阪薫英女子短期大学松本敏子研究室、2000年、99-105頁。

片岸博子 博士論文「染色技法書を通してみた江戸時代の色彩に関する研究」奈良女子大学、1999年５月20日、乙第76号。

27）石井美恵・長崎巌・伊藤紀之［他］「天然黄色系染料の高速液体クロマトグラフィーによる分析と近世小袖裂の黄系 緑系染色布の染料同定」『文化財保存修復学会誌』49、文化財保存修復学会、2005年、41-58頁。

石井美恵「江戸時代の染色技法書にみられる黄色系天然染料」『服飾文化学会誌』７（１）、服飾文化学会、2006年、1-10頁。

28）福岡裕子・齊藤昌子「共立女子学園所蔵「猩々緋羅紗地蛇の目紋陣羽織」の科学的分析と歴史上の位置づけ」『服飾文化学会誌』６（１）、服飾文化学会、2005年、21-29頁。

小松未来・西岡文夫・齊藤昌子「12～19世紀の甲冑威糸類に用いられた赤色染料と媒染剤につ

いて」『文化財保存修復学会誌』49、文化財保存修復学会、2005年、25-40頁。

福岡裕子・齊藤昌子「江戸時代の陣羽織に用いられた舶載赤色毛織物 その色と染料および媒染剤について」『文化財保存修復学会誌』51、文化財保存修復学会、2006年、38-50頁。

福岡裕子「江戸時代後期の陣羽織に関して（特集 江戸の民族藝術）」『民族芸術』22、民族芸術学会、2006年、80-87頁。

福岡裕子・河島一惠・長崎巌［他］「墨資料館所蔵陣羽織の形態、材質、加飾技法の特徴と歴史的位置づけ」『服飾文化学会誌』７（１）、服飾文化学会、2006年、71-90頁。

29）福岡裕子・笠作奈樹・齊藤昌子「共立女子学園所蔵「紫呉呂地隅入菱に女篠笹紋陣羽織」の科学的分析と歴史的考察」『共立女子大学家政学部紀要』52、共立女子大学、2006年、1-11頁。

深津裕子・笠作奈樹・齊藤昌子「江戸時代後期陣羽織に用いられた紫色毛織物の素材と技法の分析」『文化財保存修復学会誌』53、文化財保存修復学会、2008年、20-34頁。

30）丸塚花奈子「江戸時代における染色品劣化に対する意識と知識：黒および茶色染色品について」『服飾文化学会誌』16（１）、2015年、37-48頁。

31）丸塚花奈子「江戸時代文献資料に見られる洗濯・しみ抜きの手法に関する研究」『服飾文化学会誌 』18、2017年、37-48頁。

32）注31前掲書、41頁、表２「江戸時代文献資料に見られる汚れと洗浄剤および被洗物の種類」参照。

33）平成15 ～ 19年度私立大学学術研究高度化推進事業「産学連携研究推進事業」『江戸時代の小袖に関する復元的研究』関西大学アート・インスティチュート、研究代表者：河上繁樹、2003～2007年。

34）嶋野徑子「型染における防染糊に関しての一考察：大豆糊を中心に」『文化学園大学紀要　服装学・造形学研究』第30集、1999年、99-106頁。

35）土方孝子「江戸時代における防染糊についての一考察」『文化学園大学紀要』第22集、1991年、115-120頁。

36）土方孝子「防染糊についての一考察―紅花で染める場合」『文化学園大学紀要　服装学・造形学研究』第32集、2001年、75-81頁。

37）注34前掲書参照。

38）『更紗便覧』白く染ぬきよふの事（667-668頁）では、「此飛粉と云ふは絹のふるいにそば粉を入。静にふるい廻りのふちに付し飛粉を取なり」と説明があり、『更紗図譜』白く染ねきやうの事（701頁）の同じ個所にも、「蕎麦の散粉（散粉とは、蕎麦を磨て、絹篩にてふるふ時、其篩のふち或は覆などへ付し極細末をいふ）」と記されるため飛粉と散粉は同一のものと考えられる。

39）文化財保護法の一部改正については、詳しくは文化庁のホームページを参照。（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/93084801.html）2022年12月14日。

40）重要無形文化財の工芸技術のうち染織分野の保持団体認定は結城紬（保持団体：本場結城紬技術保持会）、小千谷縮・越後上布（保持団体：小千谷縮・越後上布技術保存協会）、久留米絣（保持団体：重要無形文化財久留米絣技術保持者会）、喜如嘉の芭蕉布（保持団体：喜如嘉の芭蕉布保存

会)、久米島紬（保持団体：久米島紬保持団体)、宮古上布（保持団体：宮古上布保持団体)、伊勢型紙（保持団体：伊勢型紙技術保存会）である。

41）文化財保護法における工芸技術保護の変遷については拙稿「無形文化遺産としての工芸技術―染織分野を中心として―」(『無形文化遺産研究報告』3、東京文化財研究所、2009年）を参照。

42）拙稿「工芸技術記録に関する研究―『江戸小紋技術記録』を通じて―」（無形文化遺産部プロジェクト報告書『無形文化財の伝承に関する資料集』2011年３月)、東京文化財研究所を参照。

菊 池 理 予（東京文化財研究所　無形文化遺産部）
牛 村 仁 美（元東京文化財研究所　無形文化遺産部）

表１　糊・糠の記載が見られる近世染織技法書一覧

	書籍名	出版年	出版地	出版社	著者	書籍情報	原典
1	『聞書秘伝抄』	慶安4(1651)年刊	—	—	—	『聞書秘傳抄』慶安4(1651)年刊、以後度々改版し異版がある。本書は江戸時代の染織に関する版本中最古のもの。染織関係のみ『染料植物譜』染色篇に活字化した。翻刻と校異を付録した東京家政学院大学紀要16号「聞書秘傳抄についての研究」飯塚容子・国分暁子・吉井始子（東京家政学院大学）がある。	東京大学総合図書館蔵（国書データベース）、承応元年刊本を参照。
2	『紺屋茶染口伝書』	寛文6(1666)年刊	京都　柳馬場通押小路下ル町	繪筆屋勘右衛門板本	—	『紺屋茶染口傳書』寛文6(1666)年刊本。江戸時代染物関係の単行本として最古のもの。『染料植物譜』染色篇に白井文庫本と京都府立図書館本とにより校合して収録したが、誤読の多いものが『京染の秘訣』に見え、『古代染誌』には現代語に書き直されたものが収録されている。	国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクション）、寛文6年刊本を参照。
3	『萬染物張物相傳』	元禄、宝永(1688～1710)頃刊か？	—	—	—	『萬染物張物相傳』元禄6(1693)年刊。脱落があり、現存部が原本の半分のみ。著者は明記を欠くが、序文より染物師と推定される。別項『染物集』は本書の書写本であると判明。残存部(凌霄文庫本)は『染料植物譜』染色篇に押絵共々収録してある。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
4	『当世染物鑑』	元禄9(1696)年刊	—	野田屋利兵衛	—	『当世染物鑑』元禄9（1696）年刊本。『染料植物譜』染色篇、及び『古代染誌』に活字化されている。	The Metropolitan Museum 蔵（ARC古典籍ポータルデータベース、立命館ARC提供）、元禄9年刊本を参照。
5	『秘事記』	宝永2（1705）年刊	—	洛陽六角書林茨城多左衛門板行	貝原益軒	『秘事記』宝永2（1705）年刊本。外題を『鄙事記』（巻1・2）、『秘事記』（巻3・4・7・8）、『飛しき』（巻5・6）、内題を「萬寶鄙事記」となし、8巻4冊から成る。本書の全巻は『益軒全集』巻之一に、染物門は『染料植物譜』染色篇に活字化されている。	お茶の水女子大学図書館蔵（国書データベース）、書名『万宝鄙事記』、宝永2年刊本を参照。
6	『国花万宝　日本居家秘用』	享保16(1731)刊	—	—	—	『國花萬寶　日本居家秘用』元文2(1737)年刊。「享保16(1731)年」の序があり、「元文2(1737)年巳三月吉日　心齋橋筋順慶町　浪花書林　柏原屋與市」が印行したものである。但し後刷本には著者名と刊記を削り、著者版元不明のものがある。本書は中国の『居家必要』に準じ、三宅健治が日用須知の諸事項を室屋、衣服、飲食、染色などの24門に分け略説したもの。複製本に『家政学文献集成』江戸期Ⅲ、染色門のみは『染料植物譜』染色篇に活字化されている。	東京藝術大学附属図書館（国書データベース）、元文2年刊本を参照。
7	『秘伝徳用　諸色手染草』	明和9(1772)刊	京都寺町二条下ル	書林　田中屋半兵衛板	—	『秘傳徳用　諸色手染草』明和9(1772)年刊。編者不明。凌霄文庫には同書を他に2部蔵す。『染料植物譜』染色篇に活字化した。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
8	『更紗便覧』	安永7(1778)年刊	江戸日本橋通壹町目、京都三條通高倉東江入ル	御書物師　出雲寺和泉掾	蓬萊山人歸橋	『佐羅紗便覧』安永7(1778)年刊本。内題「更紗便覧」。『染料植物譜』染色篇に本文全部と、更紗図の一部を収録したが、『古典染織資料叢書』第1巻には後出の『増補　華布便覧』と『更紗圖譜』との三部を収め詳細な解説加注を施した。なお、後年本書に『増補　華布便覧』の口絵のみを挿入し、増補版の名で重版したものに「文化5年(1808)京都　河南喜兵衛　石田治兵衛版」「明治16年(1883)大阪　華本文昌堂版」がある。明治版には刊記有りと無しの2種類があるがいずれも文昌堂版である。	国文学研究資料館蔵（国書データベース）、安永7年刊本を参照。
9	『増補　華布便覧』	安永10（1781）年刊	江戸日本橋通壹町目	御書房　出雲寺和泉掾	『佐羅紗便覧』を久須美孫左衛門が増補。	『増補華布便覧』安永10（1781）年刊本。安永7（1778）年版の『佐羅紗便覧』を華布師久須美孫左衛門周在（屋号白子屋）が増補したもの。『染料植物譜』染色篇には本文全部と、更紗図の一部とを収録し、『古典染織資料叢書』第1巻には全巻を収め、解説補注してある。	東京藝術大学附属図書館蔵（国書データベース）、安永10年刊本を参照。

10	『紺屋仁三次覚書』	天明4(1784)年写	―	―	西照寺村紺屋仁三次	『紺屋仁三次覚書』天明4(1784)年写本。肥後国玉石郡西照寺村（現・熊本県玉名郡睦合村大字西照寺）の紺屋仁三次が手写した覚書。『染料植物譜』染色篇に活字化した。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
11	『更紗図譜』	天明5(1785)年刊	大坂北久寶寺町三丁目　三休橋筋南へ入東側	製本所　花本安次郎	『増補　華布便覧』を稲葉通龍が補正。	『更紗圖譜』天明5(1785)年刊本。天明4年(1784)版『増補　華布便覧』を補正して同5年に発行。内容は母体に比し著しく整備されている。初版は天明5年刊だが、編者の没後版木は転々として、或いは改題、内容の配列を変更、分冊、合冊などが行われた雑多な諸本が現れ大正期に及んでいる。凌霄文庫蔵の後印刷本は、8種ある。『更紗圖譜』の本文は『京染の秘訣』と『中央美術』第6号に本文と更紗図の一部とは『染料植物譜』染色篇に収録。『古典染織資料叢書』第1巻には全巻を活字化して校訂補注を施した。	東京藝術大学附属図書館蔵（国書データベース）、天明5年刊本を参照。
12	『染物秘伝』	寛政9(1797)年写	―	―	紺屋清三郎	『染物秘傳』寛政9年(1797)写本。染屋清三郎の書写本。この写本の原典は不明であるが、文体、形式などの点から考察して、2種以上の書から手写したことは明らかである。全文は『染料植物譜』染色篇に活字化した。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
13	『染物屋覚書』	享和（1801～1804）年頃写か？	―	―	―	『染物屋覺書』江戸後期写本。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
14	『染物重宝記』	文化8(1811)年刊	江戸大傳馬町二丁目、同日本橋白銀町四丁目、大坂斉橋北詰、京三條寺町西	書林　大和田安兵衛、同忠助、芳田宗三郎、菊舎太兵衛	―	『染物重寶記』天明4年(1784)序。本書は「染織見本帳解説」の部所載『諸色染手鑑』の著者京都の茶屋武藤某の著。文化8年（1811）版の母本である。『染物重寶記』文化8年（1811）刊。本書は、天明4年（1784）版に10種の挿絵を挿入し本文を増補改訂したもので、少なくとも三度以上重版したものと思われる。凌霄文庫蔵は3種あり、それぞれ小異が認められる。（第1種本：文化8年刊。第2種本：頭書の第1図反物が彩色刷りとなっている以外は第1種本と同一。第3種本：前2書には欠いた大題がつけられ、その中央に「文化新板　染物重寶記」、右側に梅の図、左側に内容の紹介がある以外、前2書と同一。）『故事類苑』に引用され、『京染の秘訣』には挿絵を除く全巻、『染料植物譜』染色篇には第3種本を完全に収録した。	『家政学文献集成　第3冊』（田中ちた子、田中初夫 編、渡辺書店、昭和40〈1965〉年。国立国会図書館デジタルコレクション）に翻刻された、文化8(1811)年刊本を参照。
15	『民家日用　廣益秘事大全』	嘉永4(1851)年刊	京都寺町通佛光寺、江戸、大阪	河内屋藤四郎外十軒、須原屋茂兵衛以下八軒、河内屋藤兵衛以下二軒	浪華市隠三松館主人の編輯	『民家日用　廣益秘事大全』嘉永4年（1851）刊。 収録次項はほとんど既刊書からの抜粋集成。翻刻本に『家政学文献集成』江戸期Ⅲ、『染料植物譜』染色編に染物関係事項が活字化されている。	国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクション）、書名『広益秘事大全』、嘉永4年刊本を参照。
16	『錦嚢智術全書』（合本、別タイトル7冊） ①『百工秘術前編』 ②『拾玉智恵海』 ③『増補拾玉智恵海』 ④『拾玉續智恵海』 ⑤『拾玉新智恵海』 ⑥『秘傳世寶袋』 ⑦『秘事指南車』	嘉永4(1851)年刊	大坂	河内屋新次郎	―	『錦嚢智術全書』嘉永4年（1851）刊。下記の4種本の各目録を削除して合本し、第1～7冊にした。 『太平廣記　百工秘術』前編上中下3巻、『拾玉続智恵海』上中下3巻、『拾玉新智恵海』上中下3巻、『増補　拾玉智恵海』上中下3巻。『享保以降　大阪出版書籍目録』より初版は天明8年（1788）であり、凌霄文庫蔵の嘉永4年（1851）版は再版であることが明らかになった。『家政学文献集成』続編江戸期Ⅳに翻刻されている。	同志社大学図書館蔵（国書データベース）、書名『錦嚢智術全書』、嘉永4年刊本を参照。
17	『嶋屋右衛門染本帖』	文久2(1862)年頃筆	能登国羽咋群中邑村大字圓井村	―	嶋屋兵右衛門	『嶋屋右衛門染本帖』文久2(1862)年8月に、能登国羽咋群中邑村大字圓井村の染物職嶋屋兵右衛門が筆を起した染方覚書。最終は外国産天然染料及コールタール染料の応用にまで及ぶが、最終記述年月を詳かにしない。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。

18	『更紗染之法』	江戸後期写本か？	—	—	—	『更紗染之法』江戸後期写本。毛岡(真岡)木綿に更紗の染方を記した手写本。著者、年次も不明。表紙合わせて8枚よりなる小冊子。『染料植物譜』染色篇に翻刻を収録。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
19	『重宝　日用染物伝』	刊行年不明(江戸後期版本か？)	東都か？	—	—	『重寶　日用染物傳』江戸後期版本。内題を『秘傳　しみ抜染物法上(中・下）東都』の3巻1冊本。著者名、刊記も欠くが、外題下に品久の商号があるので、江戸に於いて品久が刊行したことが判る。記載事項は前編既刊書からの抜粋で新味はない。『染料植物譜』染色篇に全編を活字化。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。
20	『縁形　染風呂敷伝書』	明治4(1871)年写	—	—	正畫堂觀禮	『縁形　染風呂敷傳書』明治4年（1871）写本。内題「新規究理　染風呂敷傳法」を外題とした書もあるが内容は同一である。『染料植物譜』染色篇、『袱紗・風呂敷』（宮井株式会社刊）に活字化した。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』および『袱紗・風呂敷』（宮井株式会社、昭和45〈1970〉年）を参照。
21	『日本染法』	年代不明写本(明治初期か？)	—	—	—	『日本染法』明治初期写本。原典は国立国会図書館白井文庫に架蔵。本書は白井光太郎から『染料植物譜』編纂に際し、貸与された染物文献のひとつである。白井が本書を入手したのは明治42（1909）年2月22日ということが、奥書によって明らかだが、原典の書写年代は抹消され明らかでない。誤字が多く落丁もあって善本とは言い得なかったが、『染色家傳秘法』を入手前のこととて『染料植物譜』染色篇に活字化した。	国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクション）、年代不明、刊本を参照。
22	『絹糸染物秘傳染物落秘法』	明治初期か？、写本	—	—	—	『絹糸染物秘傳染物落秘法』明治初期写本。本書は「染物秘傳」に青竹色、にごん染などを、別紙に「絲類染入之法」として備後松本新三郎伝として緋縮緬染粉合せ方などを記し、その他に「しみ抜法」15項、「発明」2項がある。筆録記年を欠くが、松本新三郎の手法に一部合成染料を使用してある点から、明治初期のものと推定する。	原典が確認できなかったため『染料植物譜』を参照。

※出版年・出版地・出版社・著者は、後藤捷一『染料植物譜』はくおう社、昭和47（1942）年を参照した。
※書籍情報は、後藤捷一『日本染織文献総覧』染織と生活社、昭和55（1980）年を参照した。
　なお、『嶋屋右衛門染本帖』は、『日本染織文献総覧』に記載がなかったため『染料植物譜』を参照した。

表２　近世染織技法書に見られる糊・糠に関する記載一覧

	書籍名	見出し	
1	『聞書秘伝抄』	七　すりはくおしやう付**のり**ねりかげんの事	**とさふのり**を湯をあつくわかしてねり。いかにもほ**ひめのり**を二いろにねりてその内一いろはかたくねて**のり**をすくひあげ**のり**のだらだらとおつるほとにて。そのうへよりまづ**かたのり**をはけにてひき。さてをつけたるがよし。又**ひめのり**のこしらへは米をあを木ばをかけをく。しるき**のり**にはかみをふたにはくいきをふきかけて見ればはくのはしひらひらとへつけてたうわたにておしつけべし。**のり**のよくひよく。ひろくけづりて。そのうへにすりはくををきてこすべし。かたをつけべきまへに水の中にひたしへ**のり**をひくべし。一へん**のり**をひき又水にかたをすべし。まえへのごとくしめしをとるべし。
1	『聞書秘伝抄』	十八　らしやのおりやうの事	きわた壹匁。たぬきの毛五分。これはたてのいとなるやうにいとにして。あらあら常のごとくをるべし。毛出べし。これにても出ぬときは**ふのり**をよくとき
2	『紺屋茶染口伝書』	第廿四　桃がわそめしほのかげん	かわ少あたゝめ。すなはちなべの中にて染付申候。しをそく候へば**のり**とけ申候間。ずいぶんてまはしきなく候。又けんぼうのたぐひは。かわをあたゝめつかみよせ。もんからさきへそめしぼりて。のこり
2	『紺屋茶染口伝書』	第二　もん所**のり**のさしかげん	何にてもこくもちのたぐひには、**ひめのり**に**このり**候。
2	『紺屋茶染口伝書』	第三　**のり**かげん	つねのこもんしろめなるには。**のり**に**もち米のぬか**は。**ぬか**を右のより少ひかへ申候。又大きなるかた申まではなく候へともかきしるし申候。
3	『萬染物張物相傳』	ぎんすゝたけ	右はちやすゝたけとをりそめ。きぬまきにてよくう
4	『当世染物鑑』	きんちや	下染もゝかわに而一ぺんそめほし。二へん目に右のにして吉。むしはあくのうゑ水にてすゝぎかけ。ほをひき候へばはやくでき上り候也。

本文	頁	キーワード
そきぬのにてこし。しほりいたして一夜にてもあわのきゆるまでをくなり。又り**ふのり**を少入べし。又一いろは**ひめのり**をうすく**ふのり**にてねり合。へらにあはせ。さてすりはくをくとき小そてのおもてをたゝみにはりつけ。かたをあてかたをとりてはくおすべし。たゝみはなるほととこをかたくさしあふみおも一夜水にほとばかしこまかにすりきぬにてこすべし。**かたのり**はたうさにねりかけべし。**のり**のくさりたるがよし。春秋冬は六七日もくさらかすべし。すりするところを。はしのさきをほそくこしらへ。はさみとつておしぎれのある所たるときはうへよりぬのめ見ゆるなり。そのとき柳のいたかさくらにてもはださて猪のきばにてするべし。まへのあはせたる**のり**はうるしこすやうにぬのにとりあげ。ぬのにてかたの水をよくしめしとり。さてかたをあてゆびにておさ入むかへに板置かたをおしつけ。はけにて**のり**をおとし水にてよくながしおと	569-570	のり、とさふのり、ひめのり、ふのり、かたのり
り。きわた二匁。たぬきの毛二匁。よこのいとなり。かけ合つねのもめんをと。おろして湯せんにしてうすにてすこしつき。白水に入。もみてたゝき候へはて。ぬのを入もめは毛出べし。	576	羅紗 ふのり
但無地のたぐひはべちの事なく候。但もんどころのものは。そめやうの手まははやく染申候。もし**のり**わきへつき候はゝ。早くもみおとしそめ候へばむらずおけへいれてそめ申候。但もんどころの物は。五所にても三所にても。一所へ又其まゝ染申候。但けんぼうのかねつけやうにも同事に候。	587-588	のり
を少くわへ。うらよりさしておもてへくゞる**のり**をそとはけにてなでゝをき申	590	ひめのり、このり、のり
少くわへ。板のうへにて付かげんにねり合つけ申候。又こもんしぐろめなるにても。**のりをき**のたぐひ大きなる物には。**のり**にしほをくわへ申候。これわ	590	小紋 のり、もち米のぬか、ぬか、のりをき
ち申候。但し**のり**つよくはり其うへをうち申候。	929	のり
しるへみやうばん入。くろみ少かけてよし。右何茂もんつきは**両めんのりおき**しよく候。又ひきそめ**のり**かためんにいたし申ときは。ちらしもんところに水	619	両めんのりおき、のり

	書籍名	見出し	
4	『当世染物鑑』	本すゝ竹	下染もゝかわに而二へん染。かねくろみ大ぶんかけ ぎん出し申ときは。**のり**に而はり候而は成不申候。
4	『当世染物鑑』	うこんべにるいにもんちらしつけ	一、うこんべにるいにもんちらしつけ申しやうは。 ゆへ。**なまぬか**をまき申なり。但し**のり**に入候はく
4	『当世染物鑑』	ほんもみべにうこんのうへにかたもんちらし等つけ	一、ほんもみべにうこんのうへにかたもんちらし等 しばいいれすたき。ゆとりもちを入つけ申なり。う
4	『当世染物鑑』	両めんこもんつけ	一、両めんこもんつけやうのしだいは。其そめぢを かたのうらよりつけいだし而。ゑんしりのうけくち **いろのり**にしてつけて。いたをまくらすにほしあげ け候而よし。
5	『秘事記』	十二　染物　▲又方（又は黒染）	布帛(ふはく、ぬのきぬ)下地を紺色によく染乾し。 にかけ。しいしを用て。よく張り。日に干て乾たる にして墨にまぜ。刷毛にて布帛の表によくぬりて。 るおし)く。黒く成て。白衣にも墨うつらず。是僧の をもちゆべし。**糊**見えず。 ※（　）は、わかりにくいので追記、または振り仮名を記
5	『秘事記』	十二　染物　▲梔子(くちなし)染の法	梔子皮も実も細に刻み。一夜水にひたし。よくもみ けの日絞あげ。**糊**を付け。きぬの裏を日おもてにし
5	『秘事記』	**十二　染物　▲紺屋の糊**の法	**糯米**をよく精(しら)げて一升。少も滓(かす)なきやう ね。鍋にいれ。なる程よくいぼ出来るほどに煮て。 れ。さめざる内に。又蠣灰二匁二分。湯少許りにて 先器に入れ。又別の器に湯をいれ。右の**糊**を入たる
5	『秘事記』	十二　染物　▲もんの付やう	紋をきぬにかきて。**こんやのり**をかたくして。紋の
6	『国花万宝　日本居家秘用』	▲渋染の法	生渋一升に水九升入れ。たらひにてよく和合(まぜあ をおとし右の渋水へつけ。よくもみ合せ棹(さほ)に の尽(つく)るまで染てほすべし。渋色むらなくわた

本文	頁	キーワード
。其うへむめしるに而一ぺんそめ。いしばい水かけてよし。右何茂すゝだけに扨又つちるいがうにて。しあげしものには。ぎん出不申候。	624	のり
こんやのりに而つねのごとくかたをつけ。うへのまきものにいしばいきらい申るしからず候。	626	こんやのり、なまぬか、のり
つけ申しやうは。つねの**こんやのり**に而はなり不申候。此**のり**のたきやうはいへのまきもの**なまぬか**也。	626	こんやのり、のり、なまぬか
みづがうにてはり申。いたにはへよこつよくひかすたつをつよくひきはへ申。にやきすみにてしるしをいたしてなり。**のり**はあかねに而も。あいはなに而も。さてまくりやうはぢのなかよりまくり候而。又はへ右之かたをおもてよりつ	627	型染(両面小紋) のり、いろのり
好(よき)墨をよき比に薄くすりて盥に入。布帛をひたし。巻染にし。きぬばり時。かねて濃くすりたる好墨に。**葛のり**をよき比に練。塊(かたま)りのなき様乾きたる時に。其上にひしやくを以て。水をおほくそゝぐべし。色甚だ澤(う)着する墨染衣の法なり。墨よからねば色悪し凡黒き染物の**糊**は**葛粉(くずのこ)** 已した。	633	葛のり、糊、葛粉
て後。布袋にて漉し。滓(かす)を去り。其汁に帛(きぬ)を漬け。一夜置く。あて干す。日によく乾さゞれば。梅雨のうちに色変ずる也。	634	糊
うに細末し。蠣灰貳匁貳分入。よくまぜて後。常の団子よりは。少かたくこその後火を焼捨にして。よく蒸をき。後に取上て。何にても器(うつわ)に入とき。右の**糊**に入よくまぜて用。／〇**糊**すくなき時は。さめやすき故。**のり**を器を漬てまぜて吉。	635	糯米、紺屋の糊、糊、のり
うへにひき。そのうへに手水のこをふりかけてほし。其のち。きぬをそむる。	635	紋 こんやのり
らは)せ。生布(きぬの)にても晒布(さらし)にても。先(まづ)水にて**糊気(のりけ)**かけ。その下に渋水の入たるたらひを置て。布をしばらず干して。幾度も渋水りてよき色にそまる。	646	糊気

	書籍名	見出し	
7	『秘伝徳用　諸色手染草』	うぐひす茶	ごまめのしるにあひをまぜ。**ふのり**少し入。一ぺんきたて染てよし。
7	『秘伝徳用　諸色手染草』	かわらけ色	にいし五両をこまめの汁にてとき。**ふのり**少し入そ
7	『秘伝徳用　諸色手染草』	しやれがき	玉子つちをすみ火にてやきかへし。こまめの汁にす
8	『更紗便覧』	白く染ぬきよふの事	何色にても模様を白く染ぬくは**そばの飛粉(とびこ)**に付し**飛粉**を取なり。又明礬をよくよくつふし極々り。兎角交りかねる物ゆへ能々心得有べし。又方右たかたまるゆへ面書を用ゆべし。それにても乾来るかならず絵の具のしみるなり。能々(よくよく)加減
8	『更紗便覧』	吹絵仕様の事	此(この)吹絵更紗(ふきえさらさ)の事は色々仕法あれを置。又細き物を書時は右の**飛粉(とびこ)**にて書。吹時は**糠**をやめ**小米**をふりかけて吹事も有。
8	『更紗便覧』	金更紗の事	金更紗銀さらさの類は何にても模様を書。仕まい洗より**葛のり**を引日に當ずして能干上りたる時。角(つ時水膠をたいがいにとき。其上を又一通り書。乾か外(ことのほか)光彩(こうさい)有(ある)も仕方は右の
9	『増補　華布便覧』	黒	檳榔子　壹匁五分　石榴皮　壹匁六分貳厘　五倍子せんじものを二へんかけ。尤一ぺん一ぺんにほし。多々上々の黒となる。尤模様の方へにじみ出るものは絵の具留あしく。せうゑんじの上を筆にて二三ぺべし。外の色には梅水のとめいらす。紫と赤其外せにて水洗をして。又豆ごを仕直し絵具をさし。又水
9	『増補　華布便覧』	インチン	唐しやぼん二匁　細につぶし水少し入て暫おけばと匁　上々の御膳といふ**うどんの粉**五匁　調合してねわかし瓶に入置べし。別而京都加茂川又は柳の水な
10	『紺屋仁三次覚書』	役者すりのしよふ	一、ゑこのあぶらをよくよくにる也。此中にそれによくにやしてこゆくしてこし。右のしるにすりませろくしよふか。右はまへの仕ほふのごとく。

本文	頁	キーワード
染て。かりやすのせんじしるにて一ぺんそめうへのとめにめうばん少し水にか	651	ふのり
めてよし。	654	ふのり
りまぜ。**ふのり**少し入はけにて引染てよし。	654	ふのり
と明礬なり。此**飛粉**と云ふは絹のふるいに**そば粉**を入。静にふるい廻りのふち こまかくふるひ右の両味を皿へとうぶんに入。少し水をさし火にかけて練るな 之通皿へ入。水膠をとき入て用ゆる事もあり尤殊外書にくき物にて筆にぼたぼ 物ゆへ寒中などは火鉢にかけ側に置て用ゆへし。若(もし)明礬の方すく無時は して遣ふへし。	667-668	そばの飛粉、飛粉、そば粉
ゝども。予(よ)工風(くふう)をし唐花の類を書んと思はば其(その)形(な)りに紙 其上をあらきふるひにて**糠**を振かけ。何れの絵の具にても吹べし。又こまかく	668	飛粉(そばの飛粉)、糠、小米
ひし跡にて**葛のり**をうすくこしらへ。出来し更紗を塗物へ表を下にして張。裏 の)にて能摺。金を置んと思ふ所へ水膠にてときし胡粉にて一通り書。乾きし ぬうちに金を置べし。しばらくして金をはらへば模様に斗残るなり。新渡に殊 ごとし。	668	葛のり
四分五匁／此三味をざつと煎じさまし置。先地色を藍にて染。ほして後。此 二へんめほし上ケしうへ。おはぐろをつめたきまゝにて一ぺんかけるときは なり。これは**紺屋粘**をもやふの両面よりよくぬるがよし。ほしてぬる也。黒に ん梅水をさして干。そのうへにて**粘**にてふさぐ也。梅水の外へ出ぬやふにさす うゑんじの入たる絵具ならば留る也。是は先下絵斗をかき。続具をせぬ先に黒 洗ひをするがよし。	680	紺屋粘、粘
けるなり。上の水を去りてよくしやほんをゆびにてすりつぶし。焼めうばん壹 ばりの出る程かきまわし用。惣して絵の具其外共に寒の水よし。是を一遍湯に ど取寄時は古き樽にて取寄べし。新きはしぶ出てあしきなり。	681	うどんの粉
くろすりならはしやうゑんすみ入也。よくする也。よくよくませおき**ふのり**を て木綿きん物上さらしに付る也。あかすりならはべにがらか。朱青すりならば	723	ふのり

	書籍名	見出し	
10	『紺屋仁三次覚書』	染物紋所付るぬきよふの仕方	一、**そばのこ**　拾匁。ぎしやくから　壹両。ごぼうにして。あつくつくるがよし。一夜おく也。とだなに上をはゝきすつれば後はぬけて出るなり。あいののるいは二どにぬる也。右之通二品せんにかこにて
10	『紺屋仁三次覚書』	小紋形仕よふの事	一、先上ざらしは小紋共は**小ぬか**に。又酒屋衣の上入るゝか形きわよろしく。花色に形付を染め申とき上け染る也。よろしきとき也。但しごはこゆくいた上に形をつける也。いつれ形付小紋は二へんご入れつくりとしめりては形どしみよろしからず。一、き紋付花色物は紋はおもてよりすいぶん**かたのり**をこき。右同前によくこしらへ引留る也。
10	『紺屋仁三次覚書』	はぶたい形付の事	一、まつ**のり**をかたくねりおき。すいぶんすいぶんろし。
10	『紺屋仁三次覚書』	**なまのり**にて形付もよふ付はやそめ（の）事	一、まつ白灰水を立る也。**つねののり**ねる白灰水かのとける間たたく也。とけ申候時に**のり**の壹升入**つ**屋わらかにねり。又その上へを**つねののり**ねるよふくすためおきそれにごまの油五勺ほどさし入。よくし書へし。
10	『紺屋仁三次覚書』	上引**のり**の事	一、**そばのこ**　十匁。**麦こ**　十匁。天くわふん　二にてもさしものいたし。火にあぶりはき取べし。
10	『紺屋仁三次覚書』	付入**のり**移しの事	一、すおふ　百目。水八升入れ　しやうのふ　一両になるまてせんしつめ。かすをすて**のりこ**を入れ。
10	『紺屋仁三次覚書』	さらさ仕よふの事	一、すおふ百目に水八升入れ置。但しよの品々はくよし。ほししやうが拾匁。きわた拾匁。こへ松拾匁**のり**にませすり付る事成り。先下地白木綿にごをい
10	『紺屋仁三次覚書』	両面之形付よふの事片面より両面成る方也。**つねののり**ねるよふの白灰かん也。	一、白灰水ゆたきる時分なり。**のりこ**一升。しやう也。形付申候てさつそくうら水を取るなり。扨又うこにして右三品にしてうら水つ之上さつそくふり付も又うらおもてよりも引染る事也。

本文	頁	キーワード
し　壹両。白凡んごし　壹両。白ちやうげ　壹両。右之通りの薬種五ツ色をこかひつの中に入おくへし。久しくかゝりてひやがるがよし。その上をつばなかものならば上酒でねり付る也。ちやるいならばすにてねり付る也。ひんろふしもよし。	723	そばのこ
より下り口灰の壹升に付百四拾文も仕灰を入れ申也。**小ぬか**のたひに右之通りはまつ形付のうらの方より引ほし上け。その上へまたおもてよりごをいれほしすべし。一、きんものはひのるいのよふなるものは形つけぬまへにごを入れ。申がよし。はけかろくいたし。しめるかしめらぬよふにいたして引也。それしぬ物はもよふものも二へんにして右之通にはけかろくして引へし。尚又きぬ物すりこみ。うすく付おきてよろしくはその上へにちしやかきしばのなばしば屋	723-724	小ぬか、かたのり
とき切水をすこしも入レ申さずしてとき切る也。水入申し候ては形屋りきわわ	724-725	のり
げん也。地水たぎる時分しやうのふ一両入る也。さらしろふ貳拾め。右白ろふ**ねののり**ねるよふにねり。右しやうのふ白ろふ二品入。故に少し**つねののり**もにいたしにる也。して又ねりおき上に水お入さむしおき。さめ申候上へ水をよよくさませおく也。それに形付ならは水をさし**小ぬか**を入れあんばい調合いた	725	なまのり、つねののり、のり、小ぬか
匁。右之三色をこになし水にねりて上引いたす也。きふなる物ならは下ごなし	725	のり、そばのこ、麦こ
。さらしろふ　一両。きわた　拾匁。大おふ　拾匁。右之薬種一つに入れ三升合付る事也。その上をそむるなり。	726	のりこ
あひは**ふのり**にてもよし。又ごをこゆくしても白すりはごもよし尚又**ふのり**も。笹の葉拾匁。右の薬種壹つに入れ三升に成る迄せんじ。明ばん見合入る。**ふ**たしをひにてあぶりたゝく也。其上にまへの具合たるをする事なり。	727	ふのり
のふ壹両。さらしろふ壹両。はくちやうげ壹両。右之薬種粉にしていたしねるらよりさそくふる**ぬか**有る。先つ**小ぬか**壹升。**のりのこ**壹升。ごほふし壹両。。よくよくはわき付けておく也。ひやかり申候はゝ能くはわき染る也。藍にて	727-728	つねののり、のりこ、ぬか、小ぬか、のりのこ

	書籍名	見出し	
10	『紺屋仁三次覚書』	二へんかき両面之竹よふの事	一、りつよろしてしやうのよききすきの紙のよふな置。扨**形板ののり**の付かげん心お付。右しぶ紙のはをはゑ付置。其上に又しふ紙上に木綿付申よふに**の**付形お付る也。それを形ひやかり申候はゝ。すくにべし。しぶ紙共にはへ付。尚又紙斗りまくりはき取引印しをいたし置也。
10	『紺屋仁三次覚書』	白上りにもよふ付仕上け。うへに**のり**はり致し申候て。其上にけ引お致し差物色々仕。水につけすして仕上申候也仕様之事	一、**そはのこ**おきぬふるにてかやし置。**小麦のこ**おまゆに而ねり。すひ白て上引お致し上に下ごお少し也。明はん水によりておちるもの也。但し**のり**は少
10	『紺屋仁三次覚書』	鼠しきぶ染の仕よふ	一、すくに白木綿に豆壹合程のごゆみお引きおき。こゆくこしおき。太平すみにて中鼠程之ごゆみをかる。ひるあいたおき総して板よりはがすにおき。尚処の形と二へんを一度にいたす形を付る也。ほし上なとを差物仕一二夜いたして。そゝきおとし**のり**は
10	『紺屋仁三次覚書』	茶しきぶの仕よふ	一、ぶんご梅木のふるきをもとめおき。すいぶんこへてもよし。くわへすにもよし。／一、まへのしき**り**おろさぬまへに。右の合しるをすりこむ也。板よりよきあいにて染おき。水をしたゝめきそゝきほし
10	『紺屋仁三次覚書』	から染形付仕用	一、上々もゝの皮にかりや寸かや少しくわへ。随分也。其上お**形のり**に六ばんおとくとき入れ。尚又白下くろむへし。旦又白灰大くわ形下ごかくるべし。申候。将又付申時さつそく日あかり申候得は。水にとめおくべから寸。其日すゝぎ上け**のり**はり致所ひ付壹人はかゝりておりての品をそゝぎ取。**のり**はり
10	『紺屋仁三次覚書』	ぎん鼠の仕よふ　紋付中にこを入	一、しば茶を壹升斗よくせんじおき。少し六ばんを紋付ならはさつそく紋をそゝきおとすべし。その上

本文	頁	キーワード
る。しやうもよしあつき紙をつきながめ木綿壹反の長さにつきてしぶをいたし𛀁て又はくときの紙やふれ寸はくるよふに心を付る也。尚又形板に右之しぶ紙**り**をすく也。是も又**のり**のすきかけん心お付すき置へし。且又それに木綿はへ木綿しぶ紙くるみにまくりはき取へし。それを右之形板に引返にしてはへ付るり。おもてよりかきたる形付引替し両面に付る也。但し形之付さかひにはあい	728	形板ののり、のり
きぬふるにてかやし置。右之二品おとり。ふんに仕置申候て。めうはん之ぬるばつはこさし置差物致す也。いろき申候はゝつはなしつめにてこさぎおとすしゆるきよふに仕候はねばほそきつゝくろよりいてずすいぶん念を入るべし。	729	そはのこ、小麦のこ、のり
ほし上け形板にはへ付おき。豆二合斗りすり立たるごに水五合斗入。すいぶんけおき。二板形の内すり付形を以て壹反に右之鼠ごをしきぶはけにてすり付又壹枚の**のり**形鼠の上へにかぶせ付る也。鼠の上にかぶせる形と白形のおりるを花あいにて一入にそめ。よき水にてそゝきほし上おき。上にもへきむらさきりいたすなり。	733	のり
ゆくせんしおき。それに黄とう土を右之せんじしるにとく也。少し白灰をくわぶの通り白地に花色に入れ申程之こを入れ。ほし上け板にはへその上へに**形の**りはかずにおきひるまてはおく也。其上に**のり**形をつくる也。ほし上け先の通色々のさしもの仕るなり。下地にごを入る、ゆへに茶いろはけ申さぬなり。	733-734	形のり、のり
にこゆくせんじ置。二へん引。但しかね入不申候。又地うすくわ三べんも引灰お見合少し大く入れ也。よくねりませあんはひお可致候。六はん大くは形の其かけ引かねて仕心におぼへ置可申候。扨又形お付申其日天気よろしく日付可つけてよし。水につけ申候てさつそくすゝき上け可申候。其日形お付申候ははでんの所也。久しく形付置は形の下ちり申なり。それに付天気之よき日付水にまて致とるへし。日あかりのひま入ば殊外形のちるなり。	734	形のり、のり
さし引へし。壹遍引さつそく又返すべし。且又さんさんに水に付仕上可申候。**のり**はりいたし仕上可申候。たいいろあくけをきろふものなり。	734-735	のり

	書籍名	見出し	
10	『紺屋仁三次覚書』	紋形付藤鼠の仕よふの事	一、したごを入れおき。上にふしを三合斗りよくせし。その上にはけをかへすへし。ちきに水につけふり。まつ手つけはけそのほかしよしなよしなに気を
10	『紺屋仁三次覚書』	きぬもの正平紋仕よふ	一、おしろいを水にとき**形のり**を少入ねり合。屋わいによくあわせ。白き赤きくろ品々見合打つへきも
11	『更紗図譜』	更紗描法心得の事	（前略）紋がらなど白く染脱んとおもふには。**散粉**く所を描き。よく乾して後。一面に絵具にて塗て。
11	『更紗図譜』	黒合せ様の事	檳榔子(びんらうし)壹匁五分　石榴皮(ざくろのかは思ふ地を藍にて染。乾て後。此せんじ汁を二遍かけと。即好黒色となる也。但し鉄漿汁は温むるに及ばり丁寧にぬり。干上て後に地を染べき也。黒には絵**(のり)**を置べし。梅水の画より外へ出ぬやうにさす外の色は留るに及ばざるない。但しかように地を染黄豆(まめ)のごを調て。それそれの絵具を施し。上
11	『更紗図譜』	インチン　インチンの事図の所にしるせるを見て考べし	古渡シヤボン二匁　細かにつぶし。水少し入て。暫(みゃうばんのやきかへし)一匁　極上の**温飩(うどん**より。其外の事に用ふるにも。寒の水をよしとす。きを経れども損せず。
11	『更紗図譜』	白く染ねきやうの事	何色にても模様を白く染脱んとおもふには。**蕎麦の**し極細末をいふ。　に。明礬の極細末と二味等分にし。一方に此二味に。水膠を合し用るもあり。亦可物なれば。画家に所謂面描筆を用ふべし。其描にくなれば。寒中などは湯煎にして。旁に置て用ふべし凡少き時は。かならず絵具じゞみて鮮白ならざるな
11	『更紗図譜』	霜降更紗仕様の事	霜降の仕様に色々ありといへども。前板に一法をして。其所に置。又細き所は。右の**散粉**にて描て。と絵具を吹べし。若こまかく吹時は**小米(こごめ)**をふすべて吹絵は銅の小篩にあてて篩。四つ手刷毛といり。口にて吹ては片吹して見苦しきものなり。此前にや。其説穏ならず。翼くはこれを描成し給ふ雅君

本文	頁	キーワード
んしおき。六はんをすこしさし色を見合すべし。色よろしくは日を見立引へりあやし**形のり**をそゝき取へし。**のり**はり可致候。殊外あくけをきろふものな付る事肝要也。	735	形のり、のり
らかなる**めし**にて**そくい**をねり、きぬきれにてよくこし。是に右之色合のぐあのなり。	735	形のり、めし、そくい
(ちりこ)　散粉の事下にしるすにて。細くとも。太くとも。其好に随て其染脱其後洗ひおとせば。白く模様は残るなり。（後略）	696	散粉（蕎麦の散粉）
)壹匁六分　五倍子(ふし)四匁五分　此三味をざつと煎じさまし置。其染んとるなり。尤一遍々々よく干て。干上て後。鉄漿汁(はぐろのかね)を一遍かくるず　尤模様の方へにじみ出るものなれば。**紺屋粘(こんやのり)**を模様の裏表よ具留あしゝ。生燕膠の上は筆にて二三遍梅水をさしてよく乾し。其上にて**粘**べし。すべて紫にても。何色にても。生燕膠を合したる絵具ならば留る也。其るは。先下絵斗付て。それに**粘**を置。前にしるすごとく染めて水洗して干上。をとめて。水洗ひするもよし。（後略）	700	紺屋粘、粘
おけば解(とくる)也。水の水を去りて。シヤボンを指にてよく摺つぶし。枯礬**のこ**)五匁　を合して。ねばりの出るほどかきまはし用ふべし。凡絵具はもと臘月(らふげつ)随分清き水を汲て。これを湯に沸し。瓶に入れ貯ふべし。久し	700-701	温飩（うどんのこ）
散粉　散粉とは、**蕎麦**を磨て、絹篩にてふるふ時、其篩のふち或は覆などへ付合し。是に水少し和し。火にかけて練也。尤和かねるものなれば考てよく調べなり。但し此二味を合せたるを以て。其白く脱べき所を描んには。甚描にくききといふは筆先にかたまりて。下へつきかぬるがゆえなり。殊に乾きやすき物。凡湯煎にするは、丁子釜にて湯をわかし用ふるをよしとす。尤便利也　若明り。	701	蕎麦の散粉
るして謂らく。たとへば唐花の類を描んと思ふには。先其かたちを紙にて切くと其模様を調へ。其上をあらき篩にて**糠**をふりかけ。いづれにても思ふ所のりかけ吹べしと。愚案に。**糠**をふりたる上を吹かば。**糠**散ていかゞあるべし。ふものにて。篩の内を摺なり。但し篩と地との間を。一二寸も高く挙て摺な板にしるせる所。定めて良法なるべけれども。今少し書しるせし所詳ならざる子熟く考へてこれを調し給ひて。此書を罪する事なかれ。	701-702	散粉（蕎麦の散粉）、糠、小米

	書籍名	見出し	
11	『更紗図譜』	金更紗銀更紗仕様の事	（前略）更紗の表を下にして張。裏よりうすき**葛糊**を。胡粉水干のメン胡粉とい/へる上品を用べし。を
12	『染物秘伝』	紅重代　口傳多シ	一、弁柄の豆汁壹へん。其上に蘇芳壹返。其上に蘇／〇菊唐草の葉様には。刈安の汁壹升ニ白■拾匁入
12	『染物秘伝』	茶重代	一、下弁柄之豆汁引。其上に梅皮。刈安半分宛煎じ
12	『染物秘伝』	鼠重代	一、豆汁の中に墨を入。地を鼠にしてよし。これも
12	『染物秘伝』	黄茶重代	一、下にしらご壹返。其上刈安壹返。又刈安の汁壹
12	『染物秘伝』	柿重代	一、渋弁柄壹返引。**形のり**にて止るなり。
12	『染物秘伝』	りきう染	一、**こんにやく粘**にて形を付る。貳枚形成る共三枚
12	『染物秘伝』	千草の色花色に仕やう	一、絹布綿**のり**にて張り。よく寒からし濃いすわう
12	『染物秘伝』	蘇枋ぬき様	一、**ひめのり**一而湿し硫黄の花にて薫す。
12	『染物秘伝』	紫形付方	一、形打節**のり**に小豆粉少々入。能干して裏引いた加い引。をさへにはらうはに（す明盤に）鉄水を加に而吉。／又方始に弁柄豆汁一返引。上すはうに生
13	『染物屋覚書』	砂室	一、砂室　七尋壹反に付よく□（ママ）候**こんにや**又こいろ**のり**廿壹匁へ。たん三匁五分。本朱五分入小紋に相ためし見申候。
13	『染物屋覚書』	藍南京	一、藍南京は大豆を随分こまかにいたし候粉四合へ而上小紋を付。日数十日計りからし置。浅ぎに染水シイシ染に染上け二三日濃き白水へ入置べし。／但紋を付十日計からし置不申候而は。下た付**のり**の跡
14	『染物重宝記』	色上染直し藍の分	（前略）〇あさぎのうへは諸色茶類、とびいろるい
14	『染物重宝記』	紋ぬきの事	〇紋をぬく事。ぬき物やはそれそれの色によりてぬ茶染やきもの。黒茶。とび色るいの色をぬけば地大んもたき、これにてぬきてよし、又諸色ともに、しいれ、茶染屋ものは紋を**もちのり**につけてよし。

本文	頁	キーワード
をひき。日に干し。よく乾たる時。猪牙にて丁寧に摺。其金を置んと思ふ所ニ水膠にてときたるにて描。（下略）	702-703	葛糊
芳の汁壹升に明凡貳拾匁。**糯の粉**見合練り合せ。止め**のり**白凡□（ママ）く。其色空色すべし。	744	糯の粉、のり
引。其上に刈安之汁壹升に白凡四匁入。**のり**蓋すべし。	744	のり
粘にて蓋すべし。地は千草。	744	粘
升に白凡三匁入煎じ壹返引。同**粘**にて蓋す。地は濃きそら色。	744	粘
	745	形のり
形なり共打也。	755	こんにやく粘
をよく表より引也。しまの目引も同じ。	755	のり
	755	ひめのり
し。明礬合。上蘇木汁二返引。石灯を能々に立。其汁をすわうに合せ鉄水少しい上豆汁を少し合せるも吉。すわうに明盤を合せるには水壹升に明ばん貳十匁のふ見合あはせ貳返引。此生のふ大秘伝也。此方大吉。秡け不申候。	763-764	のり、小豆粉
く玉掛目貳拾匁程入。**のり**に致六拾匁に成／右**のり**三拾四匁へ弁がら四匁入。。たん計之時は四匁貳分入べし。／右は小紋と多少可有之候。右は牡丹から草	961	こんにやく玉、のり
。**うどんの粉**を六合入。石ばいをきかせ下夕た小紋を付候。其上へ**常ののり**に上るいたし候得は。上小紋落下た小紋残り候。夫へシイシを張りご入いたし。九十月の頃より三月頃迄は大豆の粉のかわりに随分こいごに而よし。右之通小きばみ悪し。	962	うどんの粉、常ののり、のり、ご
によし。紋付もやうにも染べし。**糊**のあくにて色ぬけて白地にまがふなり。	772	糊
き汁をつかへば、かくべつ地に損じなし。素人方手ぬきに石ばい又あくけにてにそんじる也、右のいろをぬくには梅むきに水をかげんし、やきなべにて何べめぬきはしぼよりて悪し、つかみぬきよし、何色にてもぬく所に絲を十文字に	777、784	もちのり

	書籍名	見出し	
14	『染物重宝記』	○白地心得の事	（前略）○木綿をにつくに心得あり。先水につけてらとなるなり。たきてのち水にてすゝぐ事あしし。
14	『染物重宝記』	○はり物こゝろゑの事	○むらさき。ふぢ色。あやめ。灰汁茶るい。夏日か
14	『染物重宝記』	**のりおき**心得の事	○うす茶。藤色類。**灰のり**つよきは悪し。うこん。しゝ。／○藍染屋ものは**灰のり**つよきよし。／○きりあしければ染方のそさうとなり。又は悉皆取次の
14	『染物重宝記』	○紋模様うるみを直す事	○雨天のとき水もとはり物やにて。あやめ。とび色り。ひあがりてこそげおとせばはぜるなり。いわうの汁を筆にさせばはぜる也。又右の**糊**をぬりてもよ
14	『染物重宝記』	本色まがひ色の事	（前略）江戸納戸にして蘇芳をかけ。夫より下は下中下の品々有。又下値なる蚊張の染は椿の葉をすり色そんじ。もちろん地のためにもあしゝ。総じてまをかすめるまがひ色はそめまじき事なり。
15	『民家日用　廣益秘事大全』	黒染	○黒染は下地を楊梅皮(やまもものかは)にて七八へ布壹反に山もゝの皮一斤半ばかり用ひてよし。／又に入れ。布をひたし巻染にし。しいしを以てよく張なきやうにして墨にまぜ。刷毛にて布のおもてにひなりて他の物へ墨うつらず。是いにしへの墨染の法少しも見えず。
15	『民家日用　廣益秘事大全』	梔子ぞめ	○梔子ぞめはくちなしの皮も実もこまかにきざみ。つけ。一夜おきてあくる日絞りあげ**糊**をつけ。きぬてあしくなるもの也。
15	『民家日用　廣益秘事大全』	渋染の法	○渋染の法　生渋(きしぶ)一升に水九升いれ。たらし。右の渋水へつけよくもみ合せ棹にかけ。その下めてほすべし。渋色むらなくよくそまるなり。
15	『民家日用　廣益秘事大全』	**紺屋糊**を作る法	○**紺屋糊**を作る法　**糯米**をよくしらげて一升少しもりは少しかたくこね鍋にいれ。なるほどよく煮ていさめざる内にまた蠣灰二匁二分湯少しばかりにてと器にいれ。別の器に湯をいれ右の**糊**をいれたる器を

本文	頁	キーワード
のりけをおとしてたくべし。つねにつかはぬ釜にてたけば。かなげうつりてむ染るときはしりてむらとなる也。	777-778	のりけ
ずたちし**のり**にてはれば色むらできるものなり。	779	のり
紅うこん。きがら茶。くは茶類。**もちのり**よし。**はいのり**は紋もやうあがりあぬ類茶下にいけ**のり**わろし。右はり**のり置**の事は素人の用なき事ながら。あがなんぎとなる事あり。たがいに心得べきため也。	779	のりおき、灰のり、もちのり、はいのり、のり、のり置
類うるみたるには。**うどんの粉**を水にてねり。生酢を少し入て紋もやうをぬの水をさすはあしゝ。染際のはげる事あり。／〇黒の紋所うるみたるには。柚し。**うどんのこのり**也　こい茶うるみたるにも**のり**置よし。	780	うどんの粉、糊、うどんのこのり、のり
染空色にして**のり**にすはうの淡を合せて両面より引。前にいふごとく黒にも上て**のり**に合せ。うらおもてよりひけば本色のもへぎにまがへども。三四年してがい色は染汁に無理あれば。色より地のよはりとなる罪をおそれ。慎て人の目	783-784	のり
んほど返しそめ。其上に泥をぬりて日にほすべし。下地の濃きほど色くろし。方　下地を紺色によくそめ乾し。好墨(よきすみ)をほどよく薄くすりてたらひり日にほしてかねて濃く摺置たる好墨に**葛のり**をよきほどに練り。かたまりのき。かわきたる時その上に酌にて水を多くそゝぐべし。色甚だうるはしく黒くなり。墨よからねば色わろし。惣てくろき物の**糊**は**葛**を用ゆべし。**のり**のあと	847-848	葛のり、糊、葛、のり
一夜水にひたしよくもみて後(のち)布袋にてこし。滓(かす)をさりてそめ物をのうらを日おもてにしてほす也。日によくよくほさゞれば梅雨のうちに色変じ	849-850	糊
ひにてよくまぜ。生布(きぬの)にてもさらしにても水にて**粘気(のりけ)**をおとに渋水の入たるたらひをおきて布をしぼらず干して。幾度も渋水の造るまでそ	853	粘気
滓のなきやうに細末にし。**蠣のはひ**二匁二分入れよくまぜて後。常のだんごよぼの出来る時火を焼捨にしてよくむしおき。後に取上げて何にても器にいれ。き。右の**糊**にいれよくまぜて用ゆべし。但し**糊**少き時はさめやすき故**のり**を先つけてまぜてよし。	854	紺屋糊、糯米、蠣のはひ、糊、のり

	書籍名	見出し	
15	『民家日用　廣益秘事大全』	紋所をつくるには	○紋所をつくるには。右の**紺屋糊**をかたくして紋のはかたの上より右の**糊**を付る也。
16	『錦嚢智術全書』（合本、別タイトル7冊のうち） ①「百工秘術前編」	**紺屋糊**を用不早速風流模様を染る法	絹にても木綿布類もやうを染めんと思はゝ。**蝋**をわけは**蝋**ことことく落て。模様風流に出来て染工人よ
16	『錦嚢智術全書』 ①「百工秘術前編」	衣類もん所うるみたるを白くする方	衣類もん所地白にしてうるみたるは。橙を身をとりらひ落すべし。しみ物。垢類ことぐく落る也。
16	『錦嚢智術全書』 ④「拾玉續智恵海」	絹を白張にする法	**水仙の根**をおろし摺。是を付て張べし。
16	『錦嚢智術全書』 ④「拾玉續智恵海」	衣服にすみの付たるを落す法	上絵紋なと墨にて書そこないたるには。搗立の**餅**に
16	『錦嚢智術全書』 ⑦「秘事指南車」	羅紗を織法	木綿一反。狸毛五分。これを堅の絲とし。木綿二匁すにて少しつき。**米泔汁**に入てたゝみたゝけば毛出
17	『嶋屋右衛門染本帖』	栗皮染方	綛壹〆目に付　ふし八十五匁　ろは捨五匁　桃皮三五捨匁。此品壹度に釜に入たき出し。其まゝ綛壹〆る。此綛水に而よふゆすく。其上よふほしきり。尚ぼりしるで**のり**染してかいこむ也。
17	『嶋屋右衛門染本帖』	紅飛非染様記置	下染綛壹〆目　ふし八捨匁割。　／悪灰汁少し　た百匁割。　／綛壹〆目に付そふき下直之時は壹斤半くつけ置。しぼり上け石灰之悪に而くりほし上け。元色見合せ。悪くはへてそふき綛壹〆匁に小半斤先
17	『嶋屋右衛門染本帖』	紅飛染方（此項原本横線を引き抹消しあり）	綛壹〆目に付桃皮四百廿五匁入。又ふし三百匁共入ししほり。又其汁に而□□（ママ）一度染る。直に（後略）
17	『嶋屋右衛門染本帖』	紅飛染	絲　壹〆目に付。木ぶし百目但し一度に入。　／**の**入　／明礬三捨匁貳度に入　／其外悪は色見合致す

本文	頁	キーワード
うへにひき。その上に手水**ぬか**をふりかけてほし。其後布をそむるなり。小紋	854	紺屋糊、ぬか、糊
かして心にまかせ下絵をかき。これを染しるのうちへ入べし。其後水にてすゝり一段よし。（上巻）	858	紺屋糊、蝋
て汁をしぼり。紋所にぬりてぬれたるうちに**うとんのこ**をふりかけ。干しては	859	うとんのこ
	863	水仙の根
て摺れば速やかに落るなり。	863	餅
。狸の毛二匁をぬきの絲とし。常のごとく織べし。おろして水にてたゝき。うる。毛出ざる時は。**海藿**をよくときて。布を入もむべし。	871	米泔汁、海藿
百五捨匁　ふくら綛壹〆目に付　貳貫目出してよし。但し八捨五匁。桃皮三百目入たき出し。しぼり其汁に而右之かせかいこ見。其汁にろは捨五匁入て染亦ふらしよるのしるで壹度染る。又ふくらしのしるでくる他。**のり**ふくらのし	909-910	のり
て悪してかい込。　／**のり**綛壹〆目に貳割。　ほし上け。　／明礬壹〆匁に付たき出し。　／そふ貳番たき出し。壹番貳番打込。　／右之綛染込汁にしばら又右之しぼり汁に而染上け。しばらくつけ置。右之悪に而しほりほし上け。其のかす共込染る事。是はあけは悪なし。	910	のり
。釜に而能たき出し。其釜中に右之かせ入。能たきこ見。其かせ又桃皮汁共出**のり**貳割二歩之**のり**たき出し。右之かせかうべし。しぼり右之かせほすべし。	912	のり
り壹わりかい込干上け　／蘇黄壹斤半より外入次第　但貳百四十目壹斤貳度に	913	のり

	書籍名	見出し	
18	『更紗染之法』	更紗染之法	毛岡木綿　上晒し　／右地染　水一升　生ふし　粉水一升　**ふのり**　明礬十匁　／右能々煎し細かなる
19	『重宝　日用染物伝』	染もの〻秘伝　うぐいす茶	うぐひす茶はごのしるにあゐをまぜ。**ふのり**少し入よし。
19	『重宝　日用染物伝』	染もの〻秘伝　すすたけ	す〻たけはにいし五匁ごの汁にてとき。**ふのり**少し
20	『縁形　染風呂敷伝書』	第二　地合**下張糊**をつける事	唐和木綿とも一切染る時は最初**ひめのり**と白豆のしかすを捨て。**糊**にませてむらのなきやうに平等につの上にた〻き延して。壹枚つ〻棹にかけてほすべし。
20	『縁形　染風呂敷伝書』	第三　張上りの木綿下打并紋もやう形置やうの事	干上りたる地を大は拾枚小は貳拾枚つ〻ほどかさね置べし。尤かつかふよう紋の左右上下あきを考へつし。風呂敷地に置よくおさへてつけるべし。素人細くはへ。伝法を委敷書記し別本に出す。／何れの染
20	『縁形　染風呂敷伝書』	第四　染場に取扱ふ道具の事	丸刷はさら砂上屋につかふけなり。これを風呂敷染の具屋にあり。／駒へらといふ　是はひの木をよし刷の腰をしぶ紙に巻。四所に竹釘を打つて止る。
20	『縁形　染風呂敷伝書』	第五　染草調合の事	かはいろ　／あいろう六分　ずみ三分　ねりずみ一色（中略）／右いづれもとき方は　白豆のしる　**ひ**とくべし。　／何れも色あいを合して白もめんの切ねり墨はすり鉢にてよくすりて上ずみの所をつかふ
20	『縁形　染風呂敷伝書』	第五　染やうの手順	染やうの手順　／一　**糊**を引たる染板に八分のはけもやう共形を水にてしめし地の上に置おさへ。　／てすべし。　／五　ふちを紙にてまかぬはけをもつを染る板の上に置いて。はけを軽く持つてひつけしし。　／八　又おもてをかへしてもやうの所をよけ能々考へて仕玉ふべし。自然とのみ込上手になるべ

本文	頁	キーワード
にせぬふし也　／右能々煎し刷毛にて木綿に引き干上くれは薄柿色になる　／麻にてこし刷毛にて木綿に引きよくよく干上け棒に巻き砧にてよくよく擣立る	711-712	ふのり
一ぺんそめ。かりやすにて二へん染。とめにはめうばんを水にかきたてそめて	948	ふのり
くわへ二へんそめる。	948	ふのり
るを合してつけべし。但ししろ豆壹合に水七合いれ一夜をき。臼にて能くひきけべし。但し**糊**は着物につけるほどにときてよし次に小じはのなきやうに台板。	1017-1018	下張糊、ひめのり、糊
て小じはの延る迄平等に打べし。紋は木綿のおもてうらとも両面に形を合してけるべし。紋もやうとも形の裏へ**ひめのり**を一度引。ほして染る時水にしめ工に画の書やう。又形も自由にほれる仕様。又形紙のこしらへやうとも絵図をもの屋にても。下絵かたほりとも夫々の職人にあつらへ用ゆ。	1018	ひめのり
に用ひてよし。／右刷屋は京松原堀川西に入町其外所々にあり。諸国は城下ゑとす此道具は染板に**のり**を引ものなり。大さ四寸はかりにして便利よし。／丸	1019	のり
分　〆三品　／ぶとう鼠（中略）利休ねずみ（中略）すねづみ（中略）みどり**めのりのしる**　下地張の通り　／右合したる二品に**ふのり**と焼明ばん少し入てにぬりて見本に見くらべ。若あいろうのきかね時はあいを少しくはへてよし。べし。	1021	ひめのりのしる、ふのり
にて水を引。　／二　風呂敷地をしはのできぬやうに板へつける。　／三　紋四　調合したる染しるを丸はけにて染る。一たいにむらなきやうに。ねん入れて上なですべし。　／六　もやうの形をとりて形板の上におく。　／七　うらはをのばして裏を又そめる。もやうにしまぬやうにかんがへてはけをつかうべはけにて軽くなで置べし。　／九　干棹に七分三分にかけてほすべし。何れもし。	1021-1022	糊

	書籍名	見出し	
21	『日本染法』	第七　**紫本粘**の事	数の子随分きめ細かなる所を水に入。能く塩を出し し。**饂飩の粉**に塩を少し入。やすらかにこね暫く寝 の子の通りにひきふるひ。其上**うどんの粉**ふるひに **粉**三十匁。玉子三つ。外水にて常に附る**粘**よりもか たる形付を入。仮令は煙草二三ふく吸程焚。水に上 模様はざつと焚なり。此**粘**は焚たる上は外事をいむ
21	『日本染法』	第十　黒置かた南京の事	下た染濃く煎じ殻を上け。跡にて木綿を焚き其上染 にかけ。両耳壹寸斗り水を引き。耳を入干し上け。 かたく。灰すみにてよきねづに拵へ附け。此色品は
21	『日本染法』	第十二　藤鼠置がた南京の事	ふし拾匁をよく煎じ。其水沢山に致し。熱き中にて ように風を入。二三返も染すゝき。**麩粘**濃く致し濡 にて包み。両方より絞りごしに致し。壹斤に付五六 りれは水斗り出て胡粉出す。随分ふる心にてこすへ 置形に耳上りしてあしし。胡ふん少き時は誠の染込 し火鉢に置て暖れは和らかに成。其**粘**丸刷毛にて摺 く致し附る也。
21	『日本染法』	第十五　栗皮置かた南京の事	下た黄草とうとんと漆を濃くせんし二度引。其上へ 水潜くらし濡張に致し能打。形を付け下白に仙齋に 入切にて漉し附る也。
21	『日本染法』	第十七　當世茶置かたの事	下た黄草三匁斗入。まきしめし致し絞り。石こくす 入。濡張を致し**粘**下白として上へは黒に致し。**粘**加
21	『日本染法』	第二十　木綿紅鳶の事	下た木綿濡る位にしめし。随分おもかぢに石にて。 解。桃色位にして二度引。蘇芳濃くせんじ三度も引 分わりに致し。くりこみすゝき干上る也。何れいろ 干へし。
21	『日本染法』	第廿二　濱紫條入南京の事	**粘白小豆の粉**五合。石五匁。**饂飩の粉**三合。晒阿膠 少々和らかに拵へ。篦をこめ**粘**漏る位に致し。其上 程入。うら表より壹度引。中位のすほうの中へ礬四 致し上にて**粘**落すへし。

本文	頁	キーワード
干し上け。随分細末にして微塵いて二三扁もふるひうつし。随分こまかに致せ置。**麩**をとりきめのよき所丸竹に巻つけ。遠火に干能く乾きたる所を右の数てふるうへし。是より**紫粘**合せ。根数の十匁に付**麩の粉**五匁。石二匁。**うとん**ために致し。随分篦に力を入付る也。是より**紫粘**煮る。能く湯を熱置。右に付け暫く冷し置。水より上け露を切。又大のりものは少しなかく焚。又紫藤の紋へし。	973	本紫粘、饂飩の粉、麩、うどんの粉、紫粘、麩の粉、うとん粉、粘
。壹度かけくろめ右の通り三度程くろめすゝき。直に濡張に致し。墨は簇細か少し巻打に致し。**白粘**右の通上はがたねづに致し。此ねづは**白粘**より胡粉少し仕入の染方あつらへ念入へし。	974	白粘
能く揉こみ。堅く絞り風を入。又壹度染絞り。緑礬拾貳匁。茶熱く致し群なき張に致し。置形**粘**拵へ様。**麩粘**随分堅く焚。熱き内に目のつまりたるふとき麻十匁斗りの胡粉堅く摺り。濃く延し木綿切にてゆるゆると揉漉に致し。堅く絞し。其胡粉にて**麩粘**をとき。**白粘**は胡粉少々もなき位に致へし。胡粉過る時はに見へてよし。此**粘**かけんはさめたる時。少し堅き蒟蒻の位に致し。其**粘**か少り。此あひかた墨に致し。**粘**は白の通りに胡粉なし。墨は能き灰墨にて随分黒	974-975	麩粘（ふのり）、粘、白粘
きがね壹度引。石水濃く沢山に致し操込て干上け。梅水の中へ少し入。ざつと致し。**粘**右之通りに緑青水に浸置。水を滴み随分堅く摺り。其中へ墨少し斗り	976	粘
ましまきかへにして梅水を煎し。其中へ濃き石少し入。又まきかへし絞り風を減は右之通りあわすへし。	977	粘
粘少しちゞむ位に致し付け。其上いしで中位に致し。其中へ紅殻随分能き所を。ばん**壹**度に付八匁斗りとき壹度引。干し上け水に暫く漬置。下た藍と水と半ものは水元にふりすゝきあしゝ。二三度もすしかいに致し。だつとはきすゝぎ	977-978	粘
壹匁よくとき。その水にて胡粉四匁程をもめんの切にて揉み出し。其水にて**粘**こき浅黄に染。しいしにて能すゝき干上け。中位の蹟の中へ石濃くすまし壹合匁程入。片表貳度つゝ引曳干。西郡のあく強く致し壹度つゝ引干上け。筋違に	978	粘、白小豆の粉、饂飩の粉、粘

	書籍名	見出し	
21	『日本染法』	第廿三　きぬ仙斎鼠入南京の事	**粘白豆の粉**貳合。石五勺。**うとんの粉**三合。胡粉四て合せ又ねり**粘**右の通りに合せ。硯墨てねづこく致致し篦をとめ付る也。其上**蹟**中位に致しねつ少々こ壹度に付七匁程せんじ片表壹度つゝ引。能く湿しよ入。随分早く落し干へし。
21	『日本染法』	第廿七　木綿黒條入南京の事	**粘**かけんもしめしかけんとも。仙齋の通り下形付けを壹度引干上け。ねつの石ごぐろ一度曳。右之通りし。ざつとはきすゝき干へし。
21	『日本染法』	第三十二　絹縮緬萌黄の事	**糠粘**にておもかたせ。石強く**粘**少々縮む位に拵へ。藍にてさつと二度染。直に水え致し壹反に付酢壹合
21	『日本染法』	第四十一　木綿藍南京の事	**豆の粉**壹合半。石壹合半。**饂飩の粉**三合。何れも極水にて**粘**を合せ篦に力を入こまかに付。上は形をも水強くすまし其水を粘ちゞむ位に致し付。上は形をし一度曳。少々汁にこしに致し一度石水強く澄し。染。手ざわりかろく致しすゝぎ干へし。此かた付け紺に染。水に暫く漬置手軽くふりすゝきに致し。よくしては上り悪し。少々こきくらゐに致すへし。
21	『日本染法』	第四十五　木綿仙齋鼠入南京の事	ぬりをも隨分こく致し石水にて**粘**ちゞむ位にして地け。石**蹟**に致し墨少々濃き位に致し板の上にて手早す随分こく煮つめ三度引。壹度に付礬七匁程解壹度
21	『日本染法』	第四十六　綸子洗張の事	わら灰汁濃く致し能澄し少し暖め。其中へ一夜漬置たゝよりてあしゝ。其上藍緑薄くして切にてこし壹掛。右しらはりの**粘**よりも少々濃く致し。裏随分手し。
21	『日本染法』	第四十八　黒紗綾に目を持す事	仕入黒紗綾に目を持すには。**蕨の粉**とふし濃くせん揉こみ。漆こく煎し壹度掛けくろめ。右の通り七八八十目かけ。**くず**七匁たらすにて其煮**粘**少し堅く致り。水少々入木めん切にてこし。又二ばん水を入能つにねり合せ木綿切にてこし。群なきように能くもり撫。簇をかけはり干上。日の暮元にはりしめりを**粘**過時はこわくなりて悪し。又油過時はしめり気付

本文	頁	キーワード
匁ほど木綿切にて水すくなくして揉出し。其中へ晒阿膠壹匁程よく解。其水にし篦こまかに致し付け。ねづにはこふんいらす阿膠少し入。ねつこきくらゐにく片表二返つゝ附け。づみ皮とかりやす随分こくせんじ裏表より二度宛引。礬き藍にて二度染。加減を見てしいしにてすゝき干上。左右へ筋違に致し水に	979	粘、白小豆の粉、うとんの粉、粘
干上け。黄草の煮し水にて梅と礬を煎し。板の上にて干。上は形を付白のし蹟二度墨めよくしめし。藍にて壹度染すぐに水取致し。何れ水取には筋違に致	980	粘
裏はめよく合せ。やす濃くせんじ煮つめかた表より二度つゝ曳き。しめしよき。水にて薄くのばし壹合くり込すゝき干へし。	981	糠粘、粘
微塵にてふるいかいし胡粉四匁木綿切にて煮る。水すくなく致しもみ出し。其強く致し石にて粘ちゞむくらゐに致し付へし。両面はつきかへに致し。一度石も強く粘ちゞむ位に致し付へし。両面はつきかへしにてよくごをしらば濃く致其水を沢山に引。両面は裏右の通りにいたし能しめし。能き藍にてさつと貳度は強く張はあしく。簇随分弱く致五六本かけ干上能しめし。こきあいにてよきく上は**のり**を落し染簇をかけ露を切る。能き藍にて六十四匁斗りの色に染。薄	983-984	豆の粉、饂飩の粉、粘、のり
を延刷毛にて水かすり引に致し。又そとに水沢山に吹しにてよし形を付け干あく引能干上け。其上うは形を右の**粘**かけんに致し石ごに墨少々黒く致しかりやに引。よき藍にてさつと貳度程染直し水取致へし。	985	粘
すべらかなる板の上にて筋違に致し。刷毛にて洗へし。りん子はふり洗ひにて度染。木綿切にて漉し絞り干。盤紙を張ひら打によくはぬいかけ致し張り簇を軽にはけをねかせかろく引。少ししほり又二重におりおもてどうし合せ打へ	985-986	粘
じ。其水にて随分練り合せ。板の上か渋紙にて干し。おはくろ随分こき所を又返も随分よき墨に致し。紗綾の目方八十目を百五十目に致す時は。右の**墨粘**をし。末のかさに壹勺半程入其中へ胡桃廿粒程入。湯にて茄むきたるを鉢にて摺揉出し。其中へ花の油蛤に一つ程入。紗綾壹反に揉こむ程に拵へ。右四品を一み少し和らかに絞り。三四返もたぐりかへ打込手に袋をはめ上下たより三度斗取。左右へ筋違にして巻打に致し。目方は何様にも**黒粘**にて加けん致べし。其てあしく。何れ地のかさに隨ひかけん致へし。	986	蕨の粉、墨粘、くず、粘、黒粘

	書籍名	見出し	
21	『日本染法』	第五十三　木めん仙齋置き形の事	下た百文位の浅黄に致し。黄草濃く致し三返程引。**粘**はおうどふよくひやけ苧がら少々入。墨少しあら
21	『日本染法』	第五十七　絹縮緬藍南京の事	**粘豆の粉**壹合半。**饂飩の粉**四匁。此胡粉木綿の切にこまかに付け。上は形の**粘**かけんはおもかたし。石
21	『日本染法』	第五十九　桟留色揚の事	桟留茶きやう入。或は地じま茶を濃く致し。紺いろ西氷のあく濡なからに壹度揉こみ雪き干。**麩のり**薄致し。少し湿りをとり能打べし。このすほうは明礬
21	『日本染法』	第六十　さらさ染の事	下た梅の煎じ水の中へ石水三合程入。巻返し致しほめりを取はらを出しよくうち。すほうを五六日もまめ。ふしこく煎じ一夜も休め置。其水を蛤に壹つ程蝋こく致し少し入。能き萌黄に致し其中へ**ふのり**かまた黄色はづみかわをせんじつめ。**ふしのり**は右のに致しすり。削り墨を漬置き其水をしたみよくすり
21	『日本染法』	第六十一　木綿黒中形の事	木綿墨下た濡る位に水を吹。**おものり**強く致し熱きはくろ余り水を半分半分に合せ揉こみ絞り。右の染
21	『日本染法』	第六十五　白張の事	**白米**能く洗ひ水に漬置。あらひ鉢にて摺り。又は白に致し。水余分ならは少々の内しつめ置。上は水ををむき摺り水少し入。木綿切にて漉し。右の**白のり**に絞り壹尺五寸にたぐり。奇麗なる板の上にて二三らみ右白張をはり置。縫目に簇をかけ右の袋にて上は。揉出しのあくを水に酢を入焚きすゝき。其もみは随分薄く致し干し。右の白張の通りに致すへし。張るなり。しみる明はあしく又白張を日暮先に張り
21	『日本染法』	第六十七　鬱金の事	絹壹反に付うこんの粉廿匁。湯を熱く沸し其湯にて手を入群のないように漬置。雪き酢壹合程水に延し
21	『日本染法』	第六十九　絹縮緬吟出しの事	絹壹反に付目方五十目を八拾目に致す時は随分よく分強く其**蹟**にて**漿麩**と**煮粘**を解。右の三品を木綿の二三返たぐり直し打込。手に袋をはめ上へ薄く致し是を吟出ししおさへといふ也。ほし上け上はかたをすべし。

本文	頁	キーワード
壹度に付ばん五匁程。おはくろとかりやす半分。ばんは入巻めしに致し。**茶の**ひ右の拾匁合せ麻にてよく漉し。生茶のかけんいたし付る也。	988	茶の粘
て包み揉出し。其水にて右の三品を**常ののり**かけんに致し。随分篦にて力を入にて**粘**少しちゝむ位に致付べし。	989	粘豆の粉、饂飩の粉、常ののり、粘
よくする事。蘇枋中位にして二度引。生かねを巻しめしにかひ風を入。すゝぎくたきもめんにてこし永くすまし置その**粘**を裏より引。表より撫簇を懸け耳入気をいむべし。	990	麩のり、粘
して**ふのり**少しこわき位にして巻がへに致し。しいしなしに干し上け。少ししへに煎し折を取。水壹合程にはん壹匁入。生姜五つ片入。水壹合程にせんじつ入。**麩のり**中位に致しよくこし。又かいに一つ程入。随分こき石あく少し。藍いに二つ程入。よく掻廻し箸に付て加減を見。薄き時は煮つめこく致し。すり通りに致し又麻へは濃きごふんに藍蝋を入。**ふのり**ふしをあしらいよきかけん。其墨にふし少々入る也。墨こくては刷毛ねばり悪しと心得へし。	990	ふのり、麩のり、ふしのり
中に一夜漬置。堅く絞り干。右の余り水の中へ百目に付はん四匁程入。ときお水の中へ壹度もみこみ堅く絞り干すへし。	990-991	おものり
にて曳てもよし。微塵のふるひにてこし。其上目のつまりたる絹にてふりごし捨て白無垢壹反に付三合程を五勺斗りに焚。**杏仁**廿粒程を一日一夜も漬置。皮と**煮粘**と**あんにん**と三品を白わり壹度にこむ程に拵へ能く揉こみ。少し和らか返たぐり直し能く打込み。木綿六寸斗り袷せ袋を拵て。両手にはめ手首にてか下たよりなで。水乾きの付かば水をふき撫る也。右の白無垢を青練にするに出しを木綿切にて漉し薄く致し。襟先へ付けかけんを見て青み付る也。此青み此しいしは三寸斗かけ随分手早く張るへし。夏ならは朝か晩か。冬ならは昼時少し湿りをとり。巻打致したゝむへし。	991	白米、杏仁、白のり、煮粘、あんにん
とき。熱き位に致し地をもみこみ壹度絞り風を入。又少しあたゝめ揉こみ度々くり込。堅く絞り蔭にて干。水はりに少し**のり**の風を持せはるべし。	991-992	のり
漿麩三十目に**しやうふの煮粘**中位に濃く致し。すへのかさに一つ程入。**蹟**を随袋にて能こし。其水を壹反に揉こみ少し和らかに絞り。壹尺五寸斗りにたぐり其中へ石水こく致し壹合程入。裏表よりすくにかろく引。刷毛にて能撫る也。付る時は和らかになる程水を吹もみ合せ。地を這付蹟を綿ちりめんの通りに致	992	漿麩、しやうふの煮粘、煮粘

	書籍名	見出し	
21	『日本染法』	第七十　當世茶中かたの事	下た木綿ぬれる位に水を吹。**おものり**強致し石にて引。かりやすの中へ木綿壹反に付礬三匁程を壹度引とはきすゝぎ干べし。此色は随分明ばんすくなき位
21	『日本染法』	第七十二　煤竹中形の事	下た木綿濡る位に水を吹。**おも粘**随分強く致し石にし二返引。梅随分濃く煎じ三返程引。こきおはぐろはき雪き。赤味すくなき時は石水沢山に拵へ壹度操
21	『日本染法』	第七十六　紫南京の事	**粘豆**壹合半。**うとんの粉**三合。石壹合半。微塵にてひ。形度々洗ひ付べし。上はがたも少し強く致し。より二度引。石水濃くして壹度引。裏も右の通り致五六本かけ干上け。能くいしよき藍にて紺に染。水に沸し。右の南京露を切操込みさめる程二三返簀の返筋違に致し水に入さつとはき落すべし。
21	『日本染法』	第七十八　木綿中形の事	下た木綿に水を吹**おも粘**随分強く致し。石にて**粘**ち壹度引干上け。又壹度引。かりやすこく煎じ堅く三の中へ永く染め。よくかけんを見て薄き時は又壹度
21	『日本染法』	第七十九　草柳の事	下た揉出し薄**蹟**にて二分浅黄位に致し。桃皮壹度引てのばし。裏表より澤山引干すゝぐへし。此色は**粘**
21	『日本染法』	第八十一　小紋煮浅黄の事	下た濃き浅黄に致し茄子の木を焚き。其あくよくた
21	『日本染法』	第八十二　絹紅鳶南京の事	**粘**は**白小豆の粉**貳合。石五勺足らず。**うとんの粉**三おもがちに石にて**のり**少し縮む位に合せ付る也。裏程入。裏表より三返引。又はん三匁程解水にてのはの中へ石引干上け。三四返も筋違に致し。上には**粘**
21	『日本染法』	第八十八　濃紺の事	下たしらご薄くして一度引。三返程染干しに致し。致し干上。西氷のあく強くして壹度引。干上て直に
21	『日本染法』	第八十九　紅花南京の事	**粘**は**白小豆の粉**二合程。石五勺。**饂飩の粉**三合。胡り和らかに拵へ。篦こまかにきさみ**粘**もる位に付る木綿の切にてこし。其水の中にてさらしにかわ壹匁干上け。すほうこくして壹度に付ばん四匁程入。片上け二三度も筋違に致し。上にて**粘**を落し又**粘**少し

本文	頁	キーワード
粘ちゞむ位に致付け。躇中位にして其中へ能へにからをとき桃色位に致し二度。こき梅三返程引。石水中位にして壹度引干。水に暫く漬置。筋違にしてざつに致し。はん過る時は色あしゝと心得べし。	992-993	おものり、粘
て**粘**ちゞむ位に拵へ。石躇中位にして其中へ能紅殻を解。桃色位のかけんを致一度引。石水強く致し沢山に壹度引干上け。水に暫く漬置。筋違にしてざつと込雪くべし。	993	おも粘、粘
ふるひ。胡粉四匁程水にてとき切にて漉し。其水にてあわせ随分篦にて細々遣石にて**粘**ちゝむ位にかけん致し付へし。其上白の石躇壹度引。墨くろくして表し四五日もからし置。藍にて壹度染手軽に壹度染雪き。随分かろく強く弱き簇にて軽く漬置軽くふり雪き干上け。水にてしいし紫根こくおろし。其水手引位上に揚け風を入。にしこりのあく濃くして壹度かけ。ざつとすゝき陰干。二三	994-995	粘豆、うとんの粉、粘
ゝむ位に拵へ。石躇中位にして其中へ揉出しにて薄き浅黄にこく成位に致し。返引。壹反に付はん八匁程解。水にてのばし壹度引。水にて能しめし中位の藍染。能く風を入直に水取致すべし。	995	おも粘、粘
。黄草壹返引。其上壹反に付ばん二匁程の中へとき。おはぐろ貳合程入。水に少々強く致し打へし。色黄み青み少し墨にもたすべし。	995-996	粘
らしあくにて永く煮へし。**のり**は**米粘**つよく致べし。	996	のり、米粘
合。右三品を微塵にてふるひ。薄阿膠にて解。和らかに合せ付る也。上はかたよりはん石ご中位に壹度引。又裏一返引。すほうこく煎じ絹壹反に付はん四匁し壹度つゝ引。水に暫く漬置。軽くふりよく上は**のり**を落し干上。西氷の灰汁**落し**はる時は**水のり**かすり引に致すべし。	996	粘、白小豆の粉、うとんの粉、のり、水のり
其上はん四匁。すほう濃くして随分濃紺に致し。ばん四匁を入三度程引。水取張り。染干の節随分よくすゝき。又あくを引前にさし**粘**致し灰汁を引べし。	998	粘
粉四匁水にて解。切れにて漉し。晒阿膠壹匁程解。其水にて**粘常のぬかのり**よ也。又茶化**のり**はさんしとうこんを等分に致し。湯を熱く沸し随分こく解き。程解。少しさまし其水にて**粘**を拵へ付る也。其上能あいにて薄く千種に染雪き表二度つゝ引。其上西氷のあく強く致し。石水五勺たらず入。裏表一度宛引干残りたる時はうすばをそらし削るべし。	998-999	粘、白小豆の粉、饂飩の粉、粘常のぬかのり、粘、のり

	書籍名	見出し	
21	『日本染法』	第九十　上下色粘の事	**麩粘**薄く致し木綿の袋にてこし壹度引。其上晒阿膠刷毛をねかせもる位にして壹度引。此**のり**表は千草也。千種位は裏**粘**は少しこく致すへし。又下は**粘**薄※麩粘(ふのり)
21	『日本染法』	第九十六　麻類玉子色の事	下たよききわうどう水に漬置能くすり。又紫黄皿に壹返引。其上又一度引なり。此色は玉子に薄く致し少し薄く致し。あい玉子は玉子に少し青味あるへし、こりなから漬置。随分手さわり軽く致し耳どりすれ
21	『日本染法』	第九十八　僧衣染鼠入黒差の事	承**麩粘**中位に致し。**蹟**も**ふのり**こふみに致し。其の其合せ水とろとろくらゐに致し。地を水張致し少し致し干上。能かたを合せ**粘**少しおもがたし。石少し位に染漬置。二三返筋違に致しかろくふり雪くなり、
22	『絹糸染物秘傳染物落秘法』	染物秘傳　青竹色	青竹色は　にいしを粉にし。水にてとき。**ふのり**少

※引用（旧字体、合字、略字など）にあたっては表記を通行に改めた。
※糊に関する記載には下線、糠に関する記載は二重下線、キーワードは太字とした。
※繰り返し記号（くの字点）は通読の弁に鑑みて開いた。
※頁は、後藤捷一『染料植物譜』はくおう社、昭和47（1942）年の該当箇所を記した。

本文	頁	キーワード
濃くとき。其中へ藍蝋随分こく致しこい千種位にかけん致し。**粘**少し強く致しに致し。裏は花色の位に致すべし。上下は表色こくすれば下品に見ゑるものを吉とす。	999	麩粘、粘、のり
てすり。右二た品を等分に合せ。木めんの切にて漉し。蹟随分薄く致し掻廻しよく干一度引。其上右の玉子の通りに致すべし。又濃い玉子は中の黄みの色を。何れ蹟を随分薄く致し紋は塗。**粘**に少しおもかちに落しつけ。水取にはひろば摺と知るべし。	1000-1001	粘
中へ石強ふるひこみ。能き墨にて鼠に合せ。木綿の切れ二重に致しよくこし。打。堅くはへねづかたしめし。丸刷毛にて少しふちへ心斗えい出る位にかけんちゝむ位にし付け。其上日記墨。蕎麦あくにて随分濃く澄しさし干上け。こき。きつくふれば鼠摺ると心得へし。	1001	麩粘、ふのり、粘
し入れ。二へん程染てよし。	1006	ふのり

A Study on the Glue Described in Early Modern Textile Technique Books: Toward an Understanding of the Significance of Raw Materials in the Context of Safeguarding Textile Techniques

KIKUCHI Riyo and USHIMURA Hitomi

In this paper, we focus on the glue among dyeing and weaving materials and aim to organize the information about the glue described in early modern textile technique books.

The results of this study will be used as basic data for examining how the textile techniques to be investigated in the future have inherited the techniques of the early modern period.

Particular attention will be paid to what aspects of early modern textile techniques have been inherited, and whether or not techniques for processing raw materials have been inherited, by present-day techniques.

The reason is that these are important issues when considering the safeguarding of textile techniques.

In the future, we hope to continue our research on the significance of raw materials in the context of safeguarding textile techniques by using the materials introduced in this paper.